

白雪姫と竜騎士

シュイダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんな時間が、いつまでも続けばいいな。

大人気ソーシャルゲーム、『魔法少女育成計画』。このゲームには、何万人にひとりの
割合で本物の魔法少女になれるという噂があつた。

それによつて本物の魔法少女『スノー ホワイト』になつた姫河小雪は、幼いころから
の魔法少女好きの友だちにして、魔法少女としてのパートナーである『ラ・ピュセル』こ
と岸辺颯太とともに、人々を助ける魔法少女として充実した時を送つていた。

目

次

白雪姫と竜騎士（上）

白雪姫と竜騎士（下）

竜乙女育成計画

白雪姫の誘惑

森の音楽家、現る

黒いアリス

110 76 40 26 12 1

白雪姫と竜騎士（上）

そうちやんに会いたい。

目が覚め、不思議な喪失感を覚えたあと、姫河小雪ひめかわこゆきの頭になぜかそんなことが浮かんだ。

少し前に小雪は、魔法少女となつた。妄想とか、創作の話だとかそういうしたものではなく、現実に魔法少女となつたのだ。魔法少女としての名前は、スノーホワイト。自分でつけた名前だ。

ちまた巷で大人気のソーシャルゲーム、『魔法少女育成計画』。完全無課金でありながら、課金を前提としたそれらと比べてもクオリティが高く、人気になるのも当然と言えるものだつた。そしてこの『魔法少女育成計画』には、ある都市伝説があつた。何万人にひとりの割合で、本物の魔法少女になれるというものだ。

小雪は、昔から『魔法少女』が大好きだつた。

可愛らしい魔法少女たちに心惹かれた。悪と戦う魔法少女たちの雄姿にも魅了された。

自分と同じ、魔法少女好きの幼馴染みが親戚から借りてきた、昔の魔法少女ものも見

たことがあった。画質は、確かに現代のものと比べると見劣りするが、魔法で人々を幸せにし、どんな危機にも立ち上がるその姿は、現代のものとまったく変わらないものだつた。

自分もいつか、彼女たちと同じように魔法少女になるのだ。男のため、なれたとしても魔法使いにしかなれないだろう幼馴染みにそう宣言して、悔しがらせたこともあつた。

年を重ねることに、同世代の者たちが『魔法少女』を幼稚なものだと切り捨てていくなかでも、小雪は『魔法少女』を愛し続けた。小雪にとって『魔法少女』は、自分の中の確固たる核、芯と言えるものになつていたのだ。

魔法少女になつて、みんなを助けたい。その思いは消えることなく、常に小雪の中にあつた。他人に言えば馬鹿にされることはわかつていたため、それを言葉にすることはなくなつたが、その思いを捨てることだけはしなかつた。

それだけ魔法少女になりたいと願い続けていた小雪が、『魔法少女育成計画』に手を出さないわけがなかつた。

とはいゝ、本気で魔法少女になれるなどと信じていたわけではない。ゲームをしているだけでそんな存在になれるなどと本気で思うほど、小雪は子供ではないのだ。魔法少女になれるなんて嘘だらうなー、噂は噂でしかないだらうしなー、でも魔法少

女のゲームつて興味あるし、無料なんだからやつてみるのも悪くないよね、ひょつとしたらほんとうになれるかもしねないし。そんな程度の気持ちだつた。そこはかとない期待感がにじみ出ているように思えるのは気のせいだ。

そしてゲームをはじめて約一ヶ月後、噂はほんとうだつたと知つた。

鏡に映した自分の姿は、幼いころに思い描き、画用紙に実際に絵として書いたこともある、理想の魔法少女の姿だつた。

服装は、当時流行つていた漫画の主人公が通う学校の制服をモデルにした物で、色合は『スノーホワイト』の名の通り白を基調とし、全体に花を散らしてある。

姿も、変わつていた。小雪は、愛嬌があると言われたことはあるが、美人だと言われたことはない。小雪自身も、自分の容姿に対し、そんな感じだろうと思つていた。

鏡の中の小雪は、美しいと形容するしかないほどのものになつていた。

透き通るような白い肌に、長い睫毛。しかし、小雪とはまるで違うというのに、それが自分だということに不思議と違和感がなかつた。

夢だとは思わなかつた。夢のようではあつたが、これは現実だという強い確信があつた。

そして、魔法少女育成計画のマスクコットキャラクター、ファヴから説明を受けた。

ファヴは、右半身が黒で、左半身が白の球体に、一枚だけ羽が生えた姿だ。スマイル

マークを彷彿とさせる記号的な顔が描かれているが、表情は固定されているらしく、子供のような甲高い声をしていた。

『魔法の端末』も含めてファヴからいくつか説明を受けると、その魔法の端末に記載されていた『スノーホワイト』のパーソナルデータをチェックし、使える魔法のことなどを調べた。

正義感が強いだとか、うつかり者といったもののほかに、妄想癖があるなどの記述があつたのはさておき、自分の使える魔法は、困っている人の心の声が聞こえるという、いかにも魔法少女らしいもので、小雪はとても嬉しくなった。

それから二日間ほど、小雪は夜に自室を抜け出し、人助けを行つた。新しく魔法少女になつた者は、先輩魔法少女のレクチャーを受けるものらしいのだが、念願の魔法少女になれたことが嬉しかつた小雪は、すぐにでも『スノーホワイト』として動きたかつたのだ。

『困っている人の心の声が聞こえる』というのがスノーホワイトの魔法ではあるが、そのほかに使える魔法はなかつた。魔法少女が使える魔法は、ひとりにつきひとつしかないらしく、その魔法も千差万別ということだつた。もつとも、身体能力は普通の人と比べて遥かに高く、トップアスリートでも魔法少女には敵わないぐらいなのだが、そのため、自分ではどうしようもなさそうな悩みはそのままにするしかなかつたが、

スノーホワイトの身体能力や知力でどうにかできることは、時間が許す限り助けて回った。二日間で、人助けをすると溜まるというマジカルキャンディーは、魔法の端末内のキャンディー倉庫にいっぱいになつた。

はじめての魔法少女チャットでは、ほかの魔法少女たちに快く迎えられた。すべての魔法少女がいたわけではなかつたが、来ていらない者たちはあとで紹介して貰うとして、いろいろなことを話した。

チャットの終了直前、ひとりの魔法少女から話しかけられた。名前は、ラ・ピュセル。担当地域が隣ということもあり、新人であるスノーホワイトの教育係を引き受けたといふことだつた。

どこかで会うことはできないだろうかという言葉に、翌日の深夜零時、ある海水浴場近くの一一番大きな鉄塔で会うこと約束した。その日は、憧れの『魔法少女』と、同じ『魔法少女』として会うことができるという喜びによつて、一日中落ち着かなかつたものだ。

絶対に遅刻してはならない、と待ち合わせの十五分前に約束の鉄塔に着き、てつぺんに駆け上がつた。

待ち人は、すでにそこにいた。

ひと言で言い表すなら、『竜騎士』。籠手、こね脛当て、胸当てなどの防具を要所に身に着

け、巨大な剣を背負っていた。剣の長さは一メートルぐらいはあり、幅も四十センチメートルはある。大剣という言葉がぴったりだつた。

それだけならば『騎士』とだけ呼べばいいだろうが、鞘には竜を思わせる意匠が施されており、頭には竜の角のような髪飾りを着け、腰からは尻尾のようなものが伸びていた。それらが、竜を連想させたのだ。

太腿や胸元といつた、本来は隠す部分が見えていたが、それらは非常に女性的な魅力を感じさせるものだつた。髪は、肩にかかるかからないか程度でまとめられ、左右から垂らされていた。

そこでスノーホワイトの方を見た彼女の顔からかすかな困惑が見え、自分が遅れてしまつたせいかもしれないと慌てたものだつた。

そのあとに彼女の口から出た、小雪、という呼びかけに、今度はスノーホワイトの方が困惑した。

なんでわたしの名前を知ってるんですか、というスノーホワイトの言葉に返つてきたのは、彼女が小雪の幼馴染みの少年、岸辺颯太だという答えたつた。

ベッドから身を起こす。

「そうちゃん」

名前を呟き、彼の持つ二つの姿を思い浮かべると、ほんのりと胸が暖かくなつたよう

な気がした。

颯太こと、ラ・ピュセルからまず説明されたのは、彼女もまた、ずっと魔法少女を好きでいたということだった。

ただ、女子と違つて、男子中学生の身で魔法少女が好きだなどと言つた日には、変態認定待つたなしで、村八分ムラハチにされてしまうということだつた。魔法少女もののアニメをレンタルする時は顔見知りが少ない隣町まで行つたり、魔法少女関連の漫画や小説は誰にもわからないところに隠したりと、さまざま苦労があるのだという。隠れキリシタンの気持ちがよくわかつたよ、と遠くを見ながら語られ、大変だつたんだなあ、と思うしかなかつた。

しかし颯太には悪いのだが、それを聞いた時、彼の苦労に同情するとともに小雪は嬉しくなつた。

颯太は、魔法少女のことを忘れていなかつた。表に出すことはなかつたが、そんな大変な思いをしながらも、同じ魔法少女好きの同志でいてくれたのだ、と思つたのだ。たまに見かけてもサツカーラの練習をしているところばかりで、それに夢中なんだとばかり思つていた。そう言つた時、サツカーラも楽しいけど、サツカーラと魔法少女は別腹、と返され、どちらも颯太にとつて大事なものなのだとすることもわかつた。

颯太が魔法少女になつたのは、小雪がなる一ヶ月前だつたといふ。男の身で魔法少女

になるのは非常に珍しく、この界限かいわいでは颯太だけらしい。

ほんとうに女の子になつてゐるの、というスノーホワイトの問いに、変身すれば完全に女だ、と返された。どこか恥ずかしそうだつたのが気になつたがそれはともかく、魔法少女としてコンビを組むことを約束し、二人きりの時も魔法少女としてふるまうようにすること、などのルールをいくつか設け、それから魔法少女として一緒に活動してきた。

充実している。

それは間違いないことで、こんな時間がずっと續けばいい、と思つてしまふほどだ。なにより、颯太とまた一緒にいれることが、たまらなく嬉しかつた。

ラ・ピュセルの魔法は、自身が持てる範囲で剣の大きさを変えられるといふもので、スノーホワイトのものと違つて荒事むきと言えた。なにかあつたら自分が守ると言われ、スノーホワイトは嬉しくなつたが、魔法少女をおびや脅かすようなことがそうあるわけもなく、いまのところ彼女に守つてもらうような状況には陥つていない。

だがスノーホワイトの身体能力は、魔法少女の中では低めのようだ、ラ・ピュセルに比べるとだいぶ見劣りする。単純な身体能力が必要とされる場面では、彼女がいなかつたら助けられなかつた人もいた。

そう言うと、スノーホワイトの力があるから、助けを必要としている人のところへ助けに行けるんだよ、と言つて貰えた。

お互に、補い、助け合える。

独りではないということが、とても嬉しかった。

颯太がそばにいてくれることが、とても嬉しかった。

「」

ただ、いまは、よくわからない不安のようなものが胸にあつた。
なにか、嫌な夢を見ていたような気がするのだ。

思い出すのは、颯太が小雪のそばから離れていつてしまつた時のことだ。

颯太は、幼稚園の時はずっと小雪と一緒に遊んでいたが、小学生になつてから男子の友だちと遊ぶ頻度が増えていき、中学生に上がってからは疎遠になつてしまつた。

颯太が離れてから、小雪は独りで魔法少女アニメを観ることになった。
今までではそれもだいぶ慣れだし、一緒に観ることこそないものの、ラ・ピュセルとは
それぞれが観た魔法少女アニメの話で盛り上がる時もある。

それでも、あの言いようのない寂しさは、もう味わいたくなかった。

小雪にも、仲のいい、同性の友だちが二人いる。しかし、どこか壁のようなものも小雪は感じていた。

二人が壁を作っているわけではない。壁を作っているのは、小雪の方だ。魔法少女について、心の底から語れない。そのせいなのだと思う。

不思議と、語ろうという気になれないのだ。いや、魔法少女について話はするし、それなりに熱くはなる。だが、ほんとうに心の奥底から湧きあがる思いを、口にしていい気がした。そんなふうに自然と語れるのは、颯太に対してだけだつた。
もしも颯太が女の子だつたら、小雪から離れることなく、ずっと一緒にいたのだろうか。

そんなふうに考えたこともあつたが、すぐに、それは嫌だと思うのが常だつた。
小雪は女で、颯太は男であつて欲しい。ラ・ピュセルになつた時のことはともかく、颯太は男であつて欲しい、と思うのだ。

自分は、颯太のことが好きなのだろうか。魔法少女好きの友だちとしてだけではなく、異性として。恋かどうかはつきりとはわからないが、彼とずっと一緒にいたら、と思ふぐらには颯太を意識しているのも間違ひなかつた。

だからこそ、颯太がもし魔法少女への興味を失い、また小雪のそばから離れていつたらと思うと、どうしようもなく怖くなってしまう。

ちよつと前に、ラ・ピュセルがなにか悩みを抱えていた時があつたのだが、その時も小雪は気が気でなかつた。なにに悩んでいるのかはつきりとはわからなかつたが、何人かの魔法少女に相談し、久しぶりに颯太の家へ行つて、話しをした。みんなからのアドバイスによつて彼の悩みは解決したらしく、事なきを得たようだつた。しかし、それか

ら時折遠い眼をするようになつたのはなぜなのだろうか。

それはともあれ、颯太が自分から魔法少女をやめる気はないようで、小雪は安心したものだ。だというのに、どうして颯太が離れていつた時のことと思い出してしまったのだろうか。

颯太の意志ではなく、なにか別の要因で、彼がいなくなつてしまふこともあるのではないか。そんなことが、ふと頭に浮かんだ。

白雪姫と竜騎士（下）

スノーホワイトとの待ち合わせに使つてゐる鉄塔にむかつて、駆けて行く。

眼に映る景色はどんどん移り変わっていき、我ながらとんでもない脚力だ、とラ・ピュセルは思う。いまではすつかり慣れたものではあるが、最初のころはただただ驚いたものだ。

もう辺りは暗くなつてゐるが、魔法少女は夜目が利く。月明かりがない夜でも、昼間と大して変わりなく見えるほどだ。

待ち合わせの時間より多少早いが、それはいつものことだ。いまは女になつていると
はいえ、男が女を待たせるわけにはいかない。ましてや、ラ・ピュセルはスノーホワイ
トの騎士なのだ。自分でそう決めたことでしかないが、だからこそ、そう在りたい。

それに、ラ・ピュセルは、颯太は小雪のことが好きだ。魔法少女好きの同志や、友だ
ちとしてだけでなく、異性として意識している。男子として、女子と仲良くするのがな
んとなく恥ずかしかつたため、成長するごとに彼女との接触は減つていつたが、たま
に小雪を見ると、その可愛らしさにハツとすることもあつた。これが恋だと思つたの
は、結構最近ではあるが。

また小雪と話がしたい。一緒に遊びたい。そんなことが頭に浮かぶ時はあつたが、女子と一緒にいて、からかわれるのは抵抗があつた。結局、再び彼女と話ができるようになつたのは、お互いが魔法少女になつてからだつた。

小雪に負けないぐらい、颯太も魔法少女を愛していた。それでも、颯太は男だ。どれだけ愛しても、なりたいと思つても、魔法少女にはなれない。そう思つていた。いつだつたか、わたしもいつか魔法少女になるんだ、と言つていた小雪を羨ましく思つたことを憶えている。

『魔法少女育成計画』に手を出したのは、魔法少女が好きだという理由ももちろんあるが、やはり期待があつたからだ。噂を本気で信じていたわけではないが、男でも魔法少女になれるのではないか、という期待があつた。

奇跡は、起つた。それも、二回もだ。

魔法少女になれたこともそつだが、小雪も魔法少女になつて、一緒に過ごせるのだ。

どちらも颯太にとつては、奇跡以外のなにものでもない。

彼女を守る騎士となろう。ラ・ピュセルはそう思い定めていた。

しかし、スノーホワイトと組むということは、かなり大変なことでもあつた。

彼女は、困つている人の心の声が聞こえる。困つている人というのは、当然ながらどこにでもいる。自分たちの力でどうしようもないことは、そのままにしておくしかない

が、そうでなければ可能な限り人々を助けて回る。これはかなり忙しい。

だが、それが嫌なわけではない。ラ・ピュセルも魔法少女なのだ。困っている人を助けるのが魔法少女のやるべきことだと思っているし、そもそも小雪の力になるのが、嫌なわけがない。闘う魔法少女が好きな身としては、些^{いさき}か物足りないという思いがあることも否定できないが、些細なことではあっても人を助ける行為が、闘つて人を守ることに劣るなどとも思わない。どちらも人のために行うことだからだ。

問題は、ラ・ピュセル自身のことだった。

ラ・ピュセルの正体は、岸辺颯太という男子中学生なのだ。性のこととかに興味津々な年頃なのだ。

他人には言えないが、はじめて『魔法少女』になつた時、ひと通り自分の躰^{からだ}を確かめた。自分の躰がどうなつたのか、確認しなければならないのは当然だ、仕方がないだろう、いろいろなものに言い訳するような気持ちになりながら、確かめた。はつきりと知つているわけではないので多分ではあるが、完全に女になつていると思つた。

ほかにも、なかなかアクティブに動くにも関わらず、非常に短いスノーホワイトのミニスカートだと、彼女のスカートとブーツの間から覗く絶対領域だと、ほかの魔法少女たちの無防備なところだと、そういつたことに、罪悪感とともにいろいろと疚しい思いを抱いてしまうこともあった。

そういうことが、スノーホワイトに知られたら困る。もしそれが知られ、スノーホワイトに軽蔑されてしまつたら。そんな悩みを抱いていた時があった。

スノーホワイト、というか、久しぶりに颯太の家にやつて来た小雪からのアドバイスで、そのあたりの悩みは一応どうにかなつた。ほかの魔法少女から言われたという、揉まれれば柔らかくなるだとか、胸を貸してくれるだとか、悪魔の囁きだとかいう言葉にいろいろよろしくない妄想をしてしまつたこともあつたが、心に悪が芽生えそうになつた時には、母の顔を思い浮かべるといいというアドバイスによつてだ。

効果は抜群で、それによつて即座に平常心を取り戻すことができるようになり、それまで以上に魔法少女として精力的に活動している。いろいろと複雑な思いはあるが。というか、疚しいことを考えてる時に母親の顔を思い浮かべるというのは、いろいろとキツいものがある。

それはともかく、そろそろ鉄塔が見えてくるころだつた。駆ける速度を上げる。

ほどなくして、鉄塔が見えた。近づいたところでちよつとだけ勢いを落とし、跳躍する。鉄塔に足を着けると、そのまま駆け上がつた。

わずかな時間で鉄塔を駆け上がると、すでに相棒がいた。

「つ？」

早いな、と軽く驚きながらも声をかけようとしたところでラ・ピュセルは、口を開い

たかたちのまま、止めた。

なんとなくだが、いつもとは雰囲気がちょっと違つて見えた。スノーホワイトという名前が示すように、まるで雪のようにそのまま溶けて消えてしまいそうな優しさがあつた気がした。

息を取り直し、ゴホンと咳払いをすると、スノーホワイトがハツとした様子でこちらをむいた。なにか考え方をしていたのかもしれない。

「そうちやん」

挨拶しようとしたところで、スノーホワイトが呟いた。どこか、ホツとしたような響きがあつたように思えた。

気になつたものの、二人で作つたルールについて先に指摘しよう、とラ・ピュセルは思った。

「この姿の時は、つ!？」

言葉の途中で、いきなり立ち上がりつたスノーホワイトに抱き着かれ、ラ・ピュセルの躰が固まつた。

スノーホワイトは、小雪は颯太にとつて、好きな女の子なのだ。突然こんなことをされたら、硬直するに決まつている。

我に返り、慌てて声をかける。

「スノー、——小雪？」

普段ならスノーホワイトと呼びかけるところだが、なんとなくさつきの様子を思い出し、本名で呼びかける。スノーホワイトはなにも答えず、ラ・ピュセルを抱き締める腕に力をこめてきた。

ラ・ピュセルに比べればそこまでの力はないのだが、スノーホワイトも魔法少女である以上、それなりに力は強い。少し息苦しくはあつた。

息苦しくはあつたが、スノーホワイトの様子はまるで、やつと会えた家族にしがみつく迷子のような切実さを感じさせ、ふりほどくのも抵抗があつた。

恥ずかしくはあつたが、落ち着かせるために、彼女の頭をなでる。

「小雪。なんか、あつたのか？」

ちよつと声が上擦つてはいたが、それぐらいは仕方がないだろうと思う。むしろその程度で済んでいる自分を褒めたい。

それでも彼女は、なにも言わず抱き着いたままだつた。彼女の躰の柔らかさなどを意識しないよう気をつけつつ、頭をなで続ける。

そろそろ母の顔を思い浮かべるべきかもしけない。だんだんスノーホワイトの感触や体温が無視できなくなり、そんなことを考えたところで、スノーホワイトの腕から力が抜け、彼女が身を離した。

ホツ、と息をつく。安堵のものではあるのだが、残念な気持ちもあった。
スノーホワイトが、恥ずかしそうにモジモジしながら口を開いた。

「ごめんね、そうちやん」

「あ、いや、別に謝ることないけど」

嫌ではなかつたのだ。戸惑いはしたが、決して嫌ではなかつたのだ。

彼女の躰の感触だとか、体温だとか、香りだとか。

そこまで考えたところで母の顔を思い浮かべ、心を鎮める。

「そ、そう？」

「う、うん。それで、なんかあつたのか、小雪？」

ラ・ピュセルが訊くと、スノーホワイトがうつむいた。

「その、ね。なんか、そうちやんの姿を見たら、いても立つてもいられなくなつちやつて」「どういうこと？」

「わかんないけど、そうちやんがどつかに行つちやいそうな気がして」

「？」

ラ・ピュセルの顔を見ながら紡がれたスノーホワイトの言葉に、首を傾げる。なんだ

か、いまにも泣き出しそうに見えた。

「嫌な夢でも、見た？」

「多分。よく憶えてないけど、そうちやんがいなくなつちゃう夢だつた気がする」

再びスノーホワイトがうつむいた。

彼女のその様子にラ・ピュセルは、胸が引き裂かれるような痛みを感じた。
安心させるため、微笑みながら優しく話しかける。

「心配いらないよ。僕はどこにも行かない」

「う、ん。ありがとう、そうちやん」

スノーホワイトも、微笑みを返してきた。ただ、どこか無理をしているようにも思えた。ラ・ピュセルに気を遣つていてるのかもしれない。

どうしたものか、と考えたあと、ひとつ思いついた。気恥ずかしくはあるが、彼女を安心させるためだ、と意を決する。

長剣ぐらいのサイズにした剣を鞘から抜くと、その剣の柄つかをスノーホワイトの方にむけ、片膝をついた。

キヨトンとした様子のスノーホワイトにむけ、誓いの言葉を紡ぐ。

「たとえこの身が滅びることになろうとも、あなたの剣となることを誓いましよう。我が盟友、スノーホワイト」

仕草や口調は芝居がかつたふうではあるが、ラ・ピュセル自身は大真面目だ。言葉に、嘘はない。

スノーホワイトの眼から、涙がこぼれ落ちた。

再びスノーホワイトが抱き着いてくる。躰が熱くなつた。

「やだ」

「えっ？」

耳元で聞こえたスノーホワイトの切なそうな声に、ラ・ピュセルは戸惑つた。

彼女を慰めたかつたのに、ふざけていると思われてしまつたのだろうか。

熱くなつていた躰が冷めるような、血の気が引くような感覚を覚えながらそう思つたところで、スノーホワイトが否定するように首を振つた。

「違うよつ。そうちやんがそう言つてくれるのは、すぐ嬉しいよつ。でも、そうちやんが死んじやつたらやだよつ」

「小雪」

「もう、そうちやんに置いてかれるの、やだよ」

「もう？」

涙ながらの彼女の言葉に、どういう意味だろうか、とラ・ピュセルは困惑した。自分が、彼女を置いていつたことがあつただろうか。

ラ・ピュセルの呟きに、スノーホワイトが身を離した。瞳を潤ませながらラ・ピュセルと見つめ合う。

束の間つかまためらう様子を見せたスノーホワイトが、意を決したように口を開いた。

「そうちやんが一緒に魔法少女のアニメ見なくなつた時、すぐ寂しかつたつ。なんだか、わたしだけ置いてかれちゃつた気がしてつ」

嗚咽が混じつたスノーホワイトの言葉に、ラ・ピュセルは頭をガツンと殴られたような衝撃を覚えた。

恥ずかしいから。周りから変態扱いされるのが嫌だから。だから、魔法少女に興味をなくしたふりをして、小雪と遊ばなくなつた。彼女から離れた。

だが自分は、そのことで小雪がどんな思いを抱くか、一度でもしつかりと考えたことがあつただろうか。自分のことしか考えていなかつたのではないか。誰になにを言われても、気にすることなどなかつたのではないか。魔法少女の趣味は隠しても、彼女のそばを離れることはなかつたのではないか。

よくそれで、小雪を守るなど、彼女の騎士になるなどと言えたものだ。

自分への怒りが、自嘲するような声が、後悔が、頭の中を埋め尽くしていく。

「でもね、嬉しかつた

「つ？」

「そうちやんは、魔法少女が好きなままだつたんだつて」「小雪。でも僕は」

なにも言わないで、とばかりにスノーホワイトの腕の力が増した。

締めつけるようではなく、スノーホワイトの気持ちが伝わってくるような優しい抱擁からは、ラ・ピュセルを包んでくるような温かさを感じた。

自然と、ラ・ピュセルも抱き返していた。

ありがとう。その気持ちだけが、心の内にあつた。
しばらく経つてから、どちらともなく抱擁を解いた。
身は離さず、互いに見つめ合う。

「さつきの誓い、やり直させてもらつてもいいかな？」

「うん」

再び片膝をつき、剣の柄を差し出す。

「君を、いつまでも守り続けよう。互いに年老い、別れるその時まで、僕は、君を守り続ける」

騎士としてだけではない。魔法少女の仲間としてだけではない。

岸辺颶太として、姫河小雪を守り続ける。

岸辺颶太として、姫河小雪を幸せにする。その誓いだ。

スノーホワイトの眼に涙が溜まつていく。ラ・ピュセルは慌てなかつた。

感極まつたように息を詰まらせたあと、スノーホワイトが微笑みを浮かべた。

「はいっ」

彼女のまばゆいばかりの笑顔に、ラ・ピュセルも笑顔を返した。
いや、しかし。

誓いの言葉のあと、少し経ったところで、ラ・ピュセルは自分の言葉を思い返した。
いまのはもう、プロポーズと変わらないのではないか。そう思うと、この場で身悶え
したくなるような、とんでもない恥ずかしさが湧き上がつてきた。

スノーホワイトも同じなのか、顔が真っ赤になつていた。

「あっ、えっと、その」

「あ、あのね、そうちやんつ」

「う、うん。なに？」

「わ、わたし、なりたいものがあつてねつ？」

「え？」

スノーホワイトの唐突な言葉に少し困惑する。彼女のなりたいものといえば魔法少
女だろうが、もうすでになつてているのだ。わざわざいま言うことだろうか。
そう思つたところで、スノーホワイトが恥ずかしそうに呟いた。

「お、およめ、さん」

「えっ」

「そうちやんの、お嫁さん」

全身が、燃えるように熱くなつた。スノーホワイトの顔も、さつき以上に赤くなつて
いる気がした。

スノーホワイトがうつむき、モジモジとはじめめる。

その可愛らしさにさつきとは別種の衝撃を受けたが、恥をかかせてはならない、とラ・
ピュセルは思考を切り替えた。

深呼吸をして気持ちを落ち着かせ、スノーホワイトに歩み寄る。

落ち着かせたつもりだが、躰はガチガチだつた。スノーホワイトも同じなようで、躰
の動きがぎこちない。

勇気を出せ、岸辺颯太。男だろう、男を見せろ、ラ・ピュセル。いや、ラ・ピュセル
の時は女だがそれはともかく、どんな相手でも臆さず、立ちむかうのが魔法少女だろう。
いや少女では駄目だ。男として、魔法少女魂を見せろ、と己を奮起させる。

手をなんとか動かし、スノーホワイトの手を取る。

逃げ出したい、という思いがどこかにあつた。恐怖ではない。恥ずかしさのためだ。
しかし、スノーホワイトが、小雪が勇気を出して伝えてくれたのだ。

ここで逃げたら、騎士ではない。彼女を幸せにすることなど、できはしない。
唾を飲みこむ。

スノーホワイトと見つめ合いながら、ラ・ピュセルは意を決して言葉を紡いだ。

竜乙女育成計画

いつものように鉄塔の上で待ち合わせ、ちょっとだけ語り合う。

困っている人を助けに行くために集まるわけだが、行く前にお互いの今日の出来事を話したり、ちょっとした世間話をしたりするのだ。

この魔法少女アニメが面白かつたとか、この魔法少女の活躍が恰好よかつたとか、どこぞに行つて魔法少女関連のグッズを買ってきていたとか、やはりそういう話題が多くつた。

「あ、そうだ」

「ん？」

話しあはじめて少し経つたところで、スノーホワイトが思い出したように声を上げた。

「なんだろう、とラ・ピュセルは首を傾げた。

「そうちやん。お願ひがあるんだけど」

「そうちやんはやめなさい、スノーホワイト？」

「あつ。ごめんね、そうちやん？」

スノーホワイトの言葉に、二人で笑い合う。穏やかな時間が流れていた。

笑みを含んだまま、ラ・ピュセルはスノーホワイトに改めて問いかけた。

「それで、頼みつてなんだい、スノーホワイト？」

「うん。ラ・ピュセルのおっぱい揉ませて」

「ああ、いいよ」

自然な調子で言われた言葉に反射的に返したあと、スノーホワイトの言葉を反芻す
る。

聞き間違いだろうか。おっぱい揉ませて、と言われた気がした。

「え？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「待て待て待て待てえ!?」

聞き間違いではないとでも言うように突き出された両手を、ラ・ピュセルは咄嗟に掴
んだ。スノーホワイトは手を掴まれながらも押しこんでくる。

「っ!？」

彼女の力は、ラ・ピュセルに比べれば大したことがなかつたはずだ。だというのに、
ラ・ピュセルの躰がどんどんうしろに押しこまれていく。彼女の手を握り潰さないよう
に氣を遣っているのは確かだが、それでもこんなふうに押しこまれるわけがない。
わけがわからない状況に戸惑いながら、ラ・ピュセルは声を上げた。

「いや、意味わからないぞ!?」

「だから、そうちやんのおっぱい揉ませて?」

「あ、うつ、そ、そうちやんはやめろ!?!」

なにやら可愛らしく小首を傾げながら言われ、思わず頷きそうになつたが、気の迷いを振り払うように大声を上げた。

「じゃなくて、ほんとにわけがわからないぞ!? なんでいきなりおっぱい!? キヤラだっけ!？」

「そうちやんが、そんなおっぱいつけてるから悪いんだよ?」

「え?」

「男なのにそんなおっぱいつけて、わたしへの当てつけなの?」

「え、いや、だつたら君もつければ」

「魔法少女になつてからは、アバターの途中変更つてできないんだよ?」

「あ、ああ。そうだつたね」

なにやら寒気すら感じる彼女の声に、ラ・ピュセルはそんな言葉を返すことしかできなかつた。魔法少女になつた時の姿は、『魔法少女育成計画』で設定していたアバターのものなのだが、魔法少女になつてから変更することはできないらしい。

じりじりと押しこまれながらも、彼女の手を握り潰さないよう気をつけつつ、ラ・ピュ

セルも少しづつ力を強める。力が拮抗し、やがてお互の動きが止まつた。

「いや、そもそも君、そんなこと気にする娘だつたつけ？」

「だつて、そうちやんが」

「僕？」

スノーホワイトの言葉に少し考えこむが、なにか言つた憶えはない。
自分、というかラ・ピュセルの胸に比べると確かに小さいが、かといつて小雪もスノーホワイトも、大きな胸はあまり似合わないのでないだろうか、と戸惑いながらも思つた。

スノーホワイトが、半眼になつた。

「それ、わたしの躰が幼児体型つてこと？」

「えつ」

スノーホワイトの言葉に不意を突かれ、心を読まれたことにすぐ思い当たつた。

慌てて声を上げる。

「いや、ちが」

「そうだよねー。ラ・ピュセルは、そんな女らしい躰してるものねー」

「聞いてくれ、スノーホワイト！」

なにがどうしたというのか。どこか拗ねているようにも見えるスノーホワイトに、混

乱する頭を必死で回転させる。

おっぱい。ラ・ピュセル。幼児体型。女らしい躰つき。どこか拗ねたようなスノーホワイトの様子。

「つ？」

なんとなく思い浮かんだことがあつた。自意識過剰かもしれないが、とりあえず訊いてみることにする。

「もしかして、嫉妬してる？」

ピタツ、とスノーホワイトの動きが止まつた。

その状態のまま、しばし見つめ合う。

スノーホワイトが手を離し、バツが悪そうに口を開いた。

「その、ね。そうちやんつて、おっぱいが大きい娘が好きなのかなつて。『ラ・ピュセル』の姿がそんなだし」

「ま、まあ、ね」

趣味全開で作ったものであるため、否定しようがなかつた。

「それで、なんだかそのおっぱいが妬ましくなつてきたつていうか」

「そ、そう」

いきなり飛び出したなにやらドロドロした言葉に、相槌を打つことしかできない。

ただ、スノーホワイトはひとつ思い違いをしている。

「だけどね、スノーホワイト」

呼びかけながら、彼女の頬に手を添える。とても恥ずかしいが、誤解は解いておかなければならない。

「僕は、スノーホワイトの姿も、小雪の姿も好きだよ。それこそ、ラ・ピュセルの姿よりも」

「——ほんとに？」

「うん」

彼女の瞳を見つめ、はつきりと頷く。『ラ・ピュセル』の姿は確かに颯太の趣味だが、好きな女の子の子には敵わない。

言つたあと、躰が熱くなつた。スノーホワイトの顔も真つ赤になつていた。

「だ、だからさ、あまり気にしないで欲しいんだ」「うん。ありがとう、そうちやん」

スノーホワイトの言葉にホッと息をつく。ラ・ピュセルが微笑むと、スノーホワイトも微笑んだ。

「これでひと安心。人助けにむかおう、とラ・ピュセルは思つた。

「じゃあそろそろ」

「うん。おっぱい揉ませて」

「」

空を見上げる。雲ひとつない、満面に光が散らばる、美しい星空が見えた。

できればこのまま星空を見ていたかったが、そういうわけにもいかないだろう、とスノーホワイトに顔をむける。

いろいろと言いたいことはあつたが、とりあえず訊いてみようと思つた。

「なんで？」

「揉みたいから」

端的な言葉におそろしく端的に返され、呆然とするしかなかつた。

「いいでしょ？」

「ええっと、解決、したよね？」

「うん。でも、それはそれとして、そのおっぱいすぐ柔らかそうだし、触つてみたいなつて」

「え、ええええ」

どう答えたらいいのかわからず、意味のない呻き声を洩らすしかなかつた。

どうすればいいんだ、と思いながら、この場を切り抜ける理由を探す。

「いや、でもおかしいでしょ。いまは一応女同士だし」

「そんなことないよ。むしろ女の子同士だつたら、これぐらい普通だよ？」

「—— ^{マジで} Reall y?」

「Y e s」

自分でもよくわからないが、なんとなく英語で返すと、スノーホワイトもなぜか英語で返してきた。発音はかなり綺麗だつた。どうでもいいが。

ほんとうだらうか、と彼女の言葉に對して思わなくもなかつたが、スノーホワイトはとてもきれいな眼をしていて、嘘をついているようには見えなかつた

だからといって、胸を揉ませるのは抵抗があつた。自分で揉んだことがあるのだが、その時はなにか妙な氣分になつたのだ。というか、気持ちよさがだいぶやばかつた。
「だ、だけど、僕はほんとは男だし」

「でもそうちやんは、その躰をじつくり楽しんだんでしょう?」
「つ!?

「なんで、知つてるんだ。

「あ、やつぱり」

「つ、しまつ」

鎌をかけられたことに気づき、ラ・ピュセルは歯噛みする。

軽蔑されてしまう。そう思つたところでスノー ホワイトが、すべてを包みこむような

慈愛に満ちた微笑みを浮かべた。

「怖がることなんてないよ、そうちゃん。そんなことで、そうちやんを嫌いになつたりしない。わたしを信じて」

「あ、ああ——」

その優しい言葉にラ・ピュセルは、不思議な温かさを感じた。なにやら惑わされてい る気もするが、多分気のせいだろう。

「じゃあ、揉んでいい?」

「う、うん。いいよ」

スノーホワイトが、ラ・ピュセルの胸に手を伸ばした。今度は抵抗しなかつた。

スノーホワイトは優しい手つきで胸に触れると、そのまま揉みはじめた。

「んっ」

「わっ、柔らかーい」

不思議な気持ちよさに、ラ・ピュセルの口から上擦った声が洩れるが、スノーホワイ トは気にせずに揉み続ける。自分で揉むよりも、気持ちよかつた。

恥ずかしさでいたたまれなくなるが、彼女は離してくれそうになかった。

「あ、んっ、こ、小雪っ」

「どうしたの、そうちやん?」

「そ、そろそろ、そのくらいでっ」

「ほんとにいいの？」

「えっ？」

「やめられたら困る、って声が聞こえるよ?」

「そっ」

そんなことない。そう言おうとして、できなかつた。

男なのに、いまは女になつて、おっぱいを揉まれている。それも、好きな女の子にだ。胸を揉まれる気持ちよさと、背徳感らしきものに背筋がゾクゾクしていることは、否定できなかつた。

「ひうつ!?

答えに窮しているうちにスノーホワイトが再び揉みだし、ラ・ピュセルは思わず声を上げてしまつた。

「あつ、そうちやんの困つてる声が聞こえなくなつた」

「え」

「やつぱり嬉しいんだね、そうちやん」

「ち、ちがつ」

「なにが違うの?」

僕は男で、騎士なんだ。おっぱいで感じたりなんかしないつ、と心を強く持つよう努力する。

なんだか駄目なフラグを盛大に打ち立てたような気がするが、多分気のせいだ。なぜか、くつ、殺せ、という言葉が浮かび、さらに駄目な方向に行つた氣もするが、きつときのせいだ。

以前、ラ・ピュセルとなつた時、自分の胸が揺れただけで氣を取られたり、自分の尻を触つた際にその柔らかさに陶然となつていたころがあつたが、その時とは違うのだ。いまは、心を鎮める方法を会得してある、と母の顔を思い浮かべる。

「えいっ」

「ひやつ!?

胸を揉む手に力が少し加わり、思わず可愛い声を出してしまう。母の顔はあつけなく頭の中から消え去り、いま現在自分の置かれている状況を思い出すこととなつた。

「あつ。こう揉まれると、もつと気持ちよくなつて困るつて聞こえた」「つ、くくつ!?

言葉のあと、さらに揉まれ続ける。ほんとうに、さつきよりも気持ちよかつた。だんだんと、躰の奥から、熱いなにかが広がつてくるような感覚を覚えた。

〔〕

ラ・ピュセルの息が、荒くなっていた。

なにより問題なのは、やめて欲しいはずなのに、やめて欲しくないという思いが、どこかにある。本気でマズい。

「小雪、もう」

「あつ」

「やめ、えつ？」

言い切る前に、スノーホワイトが胸を揉むのをやめた。ラ・ピュセルが訝しむのを気にせず、彼女はどこか遠くの方を見やる。

「困ってる人の声が聞こえた」

「えつ」

「行こう、そうちやん！」

「あつ、ああ、うん。そう、だね」

先ほどまでのスノーホワイトはなんだつたのか、と思うぐらいの切り替わりの早さに、ラ・ピュセルは戸惑いながらもなんとか返事をする。

躰が火照り、脚がガクガクしているが、深呼吸を何度かくり返したことで、どうにか動けるぐらいには落ち着いた。

スノーホワイトの顔を見る。静かながらも強い意志を感じさせるその瞳の輝きは、

ラ・ピュセルが好きな魔法少女のものだつた。

いつものスノーホワイトだ、といろいろな意味でホツとする。

「よし。行こう、スノーホワイト！」

「うん！」

駄の火照りは完全には収まつていないが、恥ずかしさをごまかすようにラ・ピュセルが呼びかけると、スノーホワイトも力強く頷き返した。すぐさまスノーホワイトが跳躍し、ラ・ピュセルもそれを追つて跳ぶ。
もうちよつとだつたんだけど。

「つ！」

頭に浮かんだ言葉を、ラ・ピュセルは頭をぶんぶんと振つて追い払う。

こんな時になにを考えているんだ。確かに気持ちよかつたけど、つてそうじゃない。
僕は男なんだ。

煩惱退散。色即は空。

「あつ、そうちやん、じやなくつて、ラ・ピュセルッ」

「つ、な、なんだい、スノーホワイト？」

突然ふりむいて呼びかけてきたスノーホワイトに、一瞬動搖しながらも返事をする
と、彼女は笑顔を返してきた。とても綺麗な笑顔だつた。

「続きはまた今度ね？」

「えつ」

ドクンと胸が高鳴ったのは、彼女の笑顔に対するものか、それともその言葉に対するものなのか。

それは、ラ・ピュセルにもわからなかつた。

白雪姫の誘惑

魔法少女としての人助けをいくつとなくこなし、人気のないビルの屋上でラ・ピュセルは、ふうつと息をついた。時間は、そろそろ夕飯時になる。

疲れを覚えたラ・ピュセルは、肩を回しながら隣にいるスノーホワイトに顔をむけた。彼女も疲れたのだろう、自分の肩を揉んでいた。魔法少女が肩こりを起こすのかは知らないが、とりあえず気分的なものだ。

「おつかれさま、ラ・ピュセル」

互いに微笑みながら、労いの言葉を掛け合う。スノーホワイトの笑顔を見るだけで、疲れはどこかにふつ飛んでいくような気がした。

今日は休日ということで、昼間から魔法少女として活動していたのだ。昼時には、いつたん休憩として、もとの姿に戻つて食事などもした。魔法少女に変身していれば、腹が空くことも、喉が渴くことも、眠くなることもないのだが、それはそれとして休憩はしたくなる。いや、どちらかといえば、小雪と一緒に食事をしたい、というのが主な目的だつたのかもしれない。

デートみたいだ、と意識してしまい、お互いぎこちないやり取りをしてしまった時もあつたが、楽しいひと時だった。ある意味では、二人で魔法少女として活動しているのもちよつとしたデートと言えるかも知れないが、そう考えるのは不謹慎だろうとも思う。

それにしても、ついこの間プロポーズのような告白をして、晴れて恋人同士になつたというのにこれだものな、などと苦笑混じりに思つた。

スノーホワイトと組むまでラ・ピュセルは、どちらかと言うと余暇よかを遣つて魔法少女活動を行つていた。平日は学校があるし、放課後はサッカー部としての練習があるため、夜になつてから活動していたのだ。休日も、昼間は個人的な用事、趣味に費やす時間が多かつた。

スノーホワイトは逆に、学校などの外せない用事以外はすべて魔法少女活動に費やしているのではないか、と思えるほど働いていた。魔法が魔法なので効率的に動けるというはあるだろうが、それだけ魔法少女としてみんなの助けになれるのが嬉しいということなのだろう。ラ・ピュセルもそれに付き合つて活動するようになつたが、それでも昼間は彼女ほど動いていなかつたと思う。

小雪と恋人になつてからは、部活が早く終わつた時や、ない時など、日中から彼女と合流して、前よりも積極的に魔法少女活動を行うようになつた。不純かも知れないが、

一秒でも長く小雪と一緒にいたかったからだ。こういう時、彼女と違う学校であることが悔やまれる。同じ学校だつたら、登下校も一緒にできて、ひょつとしたら彼女が部活を見に来たりしてくれたかもしれないのに、と思つたりもした。

そう考えるとやはり、魔法少女活動もデートの一環なのかもしない。

「とりあえず、こんなところ？」

「うん。いま聞こえてくる、わたしたちにどうにかできそうな悩みは、これぐらいかな」

「わかつた。それじゃあ、いつたん家に帰ろう」

「うん。夜になつたらまた集合、つてことでいい？」

「うん」

もつと一緒にいたい、という思いはあるが、あまり遅くなると家族に心配される。にしろまだ中学生なのだ。そうなつたら、互いに家族が連絡し合うだろうし、場合によつては魔法少女としての活動もしにくくなつてしまふかもしれない。それは嫌だつた。

「それじゃあ」

「あ、待つて、ラ・ピュセル」

「えっ？」

送つていこう、と声をかけようとしたところで、スノーホワイトが思い出したように

声を上げ、ラ・ピュセルは首を傾げた。

「その、ね。お願いがあるんだけど」

「お願ひ？」

どこか遠慮がちなスノーホワイトの言葉に、ラ・ピュセルはわずかに身構えた。

恋人になつてから、スノーホワイト、小雪はたまにお願いをしてくるようになつた。手を握つて欲しいとか、抱き締めて欲しいとか、おっぱいを揉ませて欲しいとかそういうしたものだ。

最後のはともかく、ほかのは恋人ならして当然と言えるものばかりだつたが、どうにも恥ずかしさが先行して、どれも颯太の方からは言い出せないでいた。情けない、と自分でも思わなくもないが、欲望で彼女を汚していいのか、という気おく後れに似た思いも胸にあつた。

「ラ・ピュセル？」

「あ、いや、それで、お願ひってなんだい？」

「えつとね、尻尾触させてくれないかな？」

「尻尾？」

自分の尻のあたりから出ている尻尾をちょっとだけ見ると、再び彼女の顔に視線を戻した。

「うん。どんな感触してるとか気になっちゃって」

「う、うーん」

胸に比べればまだ抵抗は少ないが、以前自分で尻尾に触った時のことを思い出すと、やはりためらってしまう。普通に触る分には特にどうということはないのだが、優しく触れたりすると、躰がピリピリというか、背筋がゾクゾクしてくるのだ。

「よお。二人とも、なにしてんだ？」

「ん？」

「え？」

突然かけられた言葉に二人で声を洩^もらすと、声の聞こえた方にふりむく、というか見上げる。簪に乗つた、見覚えのある二人が、空にいた。知り合いである魔法少女の二人だ。

「トップスピードと、リップル？」

首を傾げながら、ラ・ピュセルは二人の名前を呼んだ。

ひとりは、黄金色の髪を二房の三つ編みにまとめてある、幼さを感じる容姿の少女、トップスピード。黒いワンピースを着て、背の高い黒色のとんがり帽子を被るという、魔法少女というより魔女と言つた方が適切だろう恰好をしている。紫地のロングコートをマントのように羽織り、首から御守り袋を提げているのが特徴と言えば特徴で、

コートの背中には『御意見無用』という刺繡ししゅうがしてあつた。箒は彼女の持ち物で、『ラ・ピット・スワロー』という名前がついているのだが、まるでバイクのようなハンドルや風防に、マフラーやブースターまで付いていた。

猛スピードで空を飛べる魔法の箒を使うというのが、彼女の魔法だ。それは魔法なのかという疑問はさておき、『最速』トップスピードの名前の通り、その魔法の箒による飛行速度は、すさまじいものがあつた。

もうひとりはリップルと言い、魔法少女というよりは忍者やくノ一いちを思わせる少女だつた。黒く長い髪をサイドテールにし、切れ長の眼に、薄い眉。赤い襟巻に、大きな手裏剣型の髪留め、足には一本歯の高下駄を履いており、こちらも色合いは全体的に黒い。露出度はかなり高く、胸元や腹や肩から思いつ切り肌が見えている。彼女の魔法については説明されていない。

もつとも、恰好が魔法少女らしくないなど、ラ・ピュセルが他人に言えたことではない。女騎士のような外見というのもそうだが、鎧は身を守るための物なのに、下半身が水着とか下着と同レベルというのは自分でもどうなんだろうと思う。思うが、それに関してほかの魔法少女からツッコまれたことは、一回もなかつた。というかほかの魔法少女も、恰好に関しては大概な人が何人かいるので、きっとどうでもいいことなのだろう。また、魔法少女には、それぞれ担当地区、ホームや縄張りと呼ばれるものがあり、ラ・

ピュセルとスノーホワイトのようにコンビを組む間柄あいだがらでもなければ、ほかの魔法少女と会う機会はそれほどなかつた。場合によつては、パートナーのホームとも違う地区に行くこともあるが、相手によつてはかなり面倒なことにもなる。

とはいへ、そこまで目くじらを立てるのは一部の者だけで、ラ・ピュセルたちも、目の前のトップスピードたちも、繩張りへのこだわりは大してなかつた。だが、なぜここに、という疑問はあつた。

「あ、こんばんは」

「つと、挨拶が遅れたな。こんばんは」

「おう」

「どうも」

スノーホワイトの挨拶にラ・ピュセルも続けると、トップスピードとリップルが順に挨拶を返してきた。リップルは舌打ちしていたが、彼女はなにかと舌打ちをするので特に気にしない。トップスピードいわく、リップルはツンデレ、らしい。箒の高度を下げた二人が、ビルの屋上に降り立つた。

頭を切り替え、ラ・ピュセルから問いかける。

「それにしてもなぜ二人が、こんな時間に、ここへ？」

「ああ。昼過ぎからちよつと時間が空いちまつてな。で、リップルの方もたまたま時間

が空いてたつづーから、昼間のパトロールでも行こうぜってなつたんだ』

「あ、わたしたちと一緒ですね」

「おつ、そうなのか、ラ・ピュセル?」

「ああ。どうせだから今日は昼間からやろうか、ということになつたんだ。私たちは昼前からだつたけどね」

「おお、いいねえ。やっぱ魔法少女つてのは、世のため人のために役立つてこそだよな！」

「ですよね！」

「チツ」

楽しそうなトップスピードの言葉に、スノーホワイトが笑顔で同意した。リップルはやはり舌打ちしていたが、なんとなく照れているようにも見えた。

トップスピードは幼さを感じさせる外見ではあるが、口調は、伝法と言える荒っぽい喋り方だつた。もつとも、乱暴さといったものは感じられず、気のいい姉御肌という印象があつた。

そしてラ・ピュセルが口調を変えるのは、魔法少女としての自分を演じているためだ。スノーホワイトと話す時は、ある程度碎けた喋り方だつたり、岸辺颯太としての素の喋り方をすることもあるが、ほかの魔法少女がいる場合は、いわゆる高潔な女騎士と

いつた感じの口調で通していた。

「まあそれでよ。そろそろ晩飯の時間だし、ちょっと流していつたん帰るか、つて飛んでもらおまえらの姿を見つけたもんでな、ちょっとくら挨拶しておくかつてここに来たんだよ。で、さつきも聞いたけど、二人ともどうしたよ。ラ・ピュセルの方はなんか難しそうな顔してたけどよ、喧嘩か？」

「いや、喧嘩ではないよ、トップスピード。スノーホワイトが私の尻尾に触りたいと言ふものでね。どうしたものかと悩んでいたところさ」

「ああ、なるほど。確かにその尻尾って気になるよな。なあ、リップル？」

「チツ」

「あ、やっぱりトップスピードも気になるんですね」

「えつ」

トップスピードの言葉と、残る二人の反応に、ラ・ピュセルは危機感を覚えた。

トップスピードとスノーホワイトだけでなく、リップルも舌打ちこそしたものの、視線がラ・ピュセルの尻尾にチラチラとむけられている気がした。

以前、トップスピードにいきなり尻尾を握られた時、驚いて転びそうになり、リップルのお腹に触つてしまつたことがあつた。なめ柔らかく、なめ滑らかだつた彼女のお腹の感触は、いまだに忘れることができない。トップスピードが悪い、ということでリップルに

怒られたのは彼女の方だつたが、いろいろと申し訳ない気持ちになつたものだ。

慌てて尻尾を背後に回し、反射的に手を尻に被せる。

「おいおい。そんな警戒しなくてもいいだろ？」

「そうだよ、ラ・ピュセル。嫌だつたらわたしも無理になんて言わないし」

「あ、いや、嫌というかなんというか」

嫌というか、もしも変な反応をしてしまつたら。また、マズいことをしてしまつたら。リップルのお腹の感触を思い出しながらそんなふうに考へると、さすがに抵抗があつた。

「――？」

ピタツ、とスノーホワイトが束の間硬直し、眼がわずかに細まつた気がした。

それにラ・ピュセルが反応する前に、チツとリップルが舌打ちし、スノーホワイトにむき直つた。

「ところで、こうやつて面とむかつて話すのははじめてかな、スノーホワイト？」

「あつ、そうですね。挨拶が遅れちゃつてしまふせん」

暗い、というより大きな声を出したくないということなのか、静かに話すリップルに、スノーホワイトが慌てて応じた。

トップスピードが首を傾げた。

「あれ、おまえら会つたことなかつたつけ？」

「ラ・ピュセルから話を聞いたり、魔法少女チャットで見たことはありますけど、直接話をしたことはなかつたと思います」

「あ、そうか。いや、リップルのやつが」

「チツ」

「つと、ああ、わかつた、わかつた。言わねーって」

『――？』

「あー、別に悪口とかそういうことじゃねえから、あんま気にしないでくれ」

『はあ』

リップルの舌打ちのあと、トップスピードが彼女の方を見て言つた言葉に、スノーホワイトと一緒にラ・ピュセルも首を傾げるが、なにを言おうとしたのかは、二人とも説明してくれそうになかった。

それにしても、トップスピードとリップルは舌打ちで会話ができる、という話を聞いたことがあつたが、いまのを見る限りほんとうなのかもしれない。

「スノーホワイトです。よろしくお願ひします」

「私は、リップル。よろしく」

スノーホワイトがお辞儀をし、リップルが会釈をした。

ドーカ、リップル＝サン、ドーカ、スノーホワイト＝サン、とお互に合掌してお辞儀し合う二人の姿が脳裏をよぎったのはなぜだろうか、と思いつつリップルの顔を見る。

あのタイミングで会話に割つて入つてくれたのは、ラ・ピュセルへの助け舟を出してくれたということなのだろうか、と思ったのだ。

リップルが、ラ・ピュセルの視線に気づいた。

「リップル」

「チツ」

ラ・ピュセルが声をかけようとしたところで、リップルが舌打ちするとともにそっぽをむいた。気にするな、ということなのか、別にそういうわけじやないとでも言いたいのかはわからなかつたが、とりあえず感謝の意を示すため、小さく頭を下げておく。

リップルはまた舌打ちをすると、トップスピードに顔をむけた。

「要件は済んだだろ、トップスピード。さつさと帰ろう」

「つと、そうだな。晩飯も作んなきやいけねえし。の前に」

トップスピードがラ・ピュセルに近づき、顔を覗きこんできた。スノーホワイトが、むつと顔をしかめた気がした。

いろんな意味で一瞬ドキッとするが、反射的に母の顔を思い浮かべて心を鎮め、ラ・

ピュセルは口を開いた。

「トップスピード。私の顔になにか？」

「いや、前に会った時と、なんか顔つきが違うように見えてよ」

「顔つき？」

「凜々しくなつた、つつーのかね。なんか別なやつに見えた気がしたんだよ」

「なんと言つていいのかわからず、なんとなくスノーホワイトの顔を見る。なんだか、嬉しそうな、しかしどこか拗ねたような、複雑そうな表情をしていた。

チツ、とリップルが舌打ちした。

「トップスピード」

「あー、わかつたつて。そう急かすなよ、相棒」

「誰が相棒だ」

「リップル」

「チツ」

じやれ合いながらトップスピードはラ・ピュセルから離れ、等に跨つた。^{またが}続いてリップルが、舌打ちしながらも自然な調子で彼女のうしろに跨る。

「じゃーな、二人とも」

「それじや」

「あ、はい。それじゃ、また」

「また、いずれ」

「おうつ」

別れの挨拶をし合い、トップスピードたちが飛んで行く。みるみるうちに、彼女たちの姿は小さくなつていった。

「ねえ、そうちやん」

「そうちやんは、やめ

やめてくれ、とスノーホワイトの言葉に返そうとむき直つたところで、ラ・ピュセルは思わず言葉を止めた。スノーホワイトの眼は、笑つていなかつた。

「ど、どうしたんだ、スノーホワイト？」

「リップルのお腹を触つたつて、どういうこと？」

「つ！」

驚愕したあと、ラ・ピュセルはハツとした。さつきのトップスピードたちとの会話の際、あの時のこと思い出してしまつたせいか、と思つた。

「ち、違うんだ、小雪、聞いてくれ！」

「なにを？」

「じ、事故だつたんだ。トップスピードに尻尾を握られてびっくりしちやつて、転びかけ

たところにたまたまりップルのお腹があつて。決して疾しいことはしていない。信じてくれ！」

「うん。それは信じる。でも、柔らかくて滑らかなあの感触は忘れられない、つて感想はなに？」

「ア、ウ、オ」

言^{イエ}えない。と、いうか深く静かに怒つておられる、と氣^け圧^おされる。なんだか彼女の魔法の精度が上がっている気がするのは、気のせいだろうか。

スノーホワイトが、ラ・ピュセルに近づいて来た。

ビンタの一発や二発、甘んじて受け入れよう、とラ・ピュセルは観念した。それ以上の中ものが来るかもしれないが、それも仕方ないかもしない。ただ、別れることだけは嫌だつた。

抱き締められそうなぐらい近くに、スノーホワイトが来た。彼女の手が持ち上がる。顔をはたかれることを予想して、思わずラ・ピュセルは眼を瞑^{つぶ}つた。

「つ？」

手を掴まれた、と感じた直後、掌^{てのひら}がなにかに押しつけられた。温かく、柔らかで、滑らかだつた。

ハツと眼を開くと、顔を真つ赤にしたスノーホワイトの顔があつた。

状況がわからず、視線を下に落とすと、スノーホワイトがラ・ピュセルの手を自分のお腹に触れさせていた。服は捲り上げられており、素肌が見えている。

「え、えつ？」

「わ、わたしのお腹、どうかな、そうちやん？」

とても恥ずかしそうに訊いてくるスノーホワイトの言葉に、ようやく自分がなにをして貰っているか把握した。

スノーホワイトのお腹に、触らせて貰っている。

把握はしたものの、なぜこんなことになつているのか理解ができないうえ、思つてもみなかつた事態に頭の中が真っ白になつていた。

「や、やつぱりリップルのお腹の方がいいの？」

「つ!？」

泣きそうなスノーホワイトの様子に、ブンブンブンと慌てて首を横に振つて答える。なぜスノーホワイトにこんなことをされているのかわからないが、リップルの方がいいということはない。というかスノーホワイトが、小雪がいい。

「ほ、ほんと?」

彼女の言葉に間をおかず、勢いよく何度も首を縦に振る。

「そ、それじや、どうかな、そうちやん?」

「そ、その、すごくスベスベで、柔らかくて」

なで回したい、と思ったが、そんなことを言つて、気持ち悪いと思われたりしないだろうか、と理性がラ・ピュセルを制止した。

「い、いいよ、そうちやん」

「え？」

「も、もつと触つていいよつ。遠慮とかしないでつ」

「つ!？」

さらに顔を赤くしながら、恥ずかしさをまかすように大きめの声で紡がれたスノーホワイトの言葉に、ラ・ピュセルの頭はますます混乱した。

落ち着け、ラ・ピュセル。冷静になるんだ、岸辺颯太。

理性と欲望がせめぎ合うさまが、頭に浮かんだ。理性はラ・ピュセルの姿をしていて、欲望は颯太の姿をしていた。両者ともに剣を持ち、斬り結んでいた。

彼女の騎士になると誓つたんだろう。そんな彼女を自分の欲望で汚していいのか。彼女を大切にするのではなかつたのか。

なに言つてるんだ。彼女がそれを望んでるんだぞ。その思いを無碍にする方が、よっぽど彼女を傷つける行為じやないか。

剣と、言葉をぶつけ合う。欲望の『颯太』の方が優勢で、理性の『ラ・ピュセル』の

動きは精彩を欠いていた。

それでも、僕は騎士なんだつ。欲望なんかに負けたりしないつ。

そんな思いが湧き上がり、『ラ・ピュセル』の動きが鋭くなつた。その勢いのまま『颯太』を押しはじめる。

「つ、え、えいつ！」

「つ!？」

理性が打ち勝とうとしたその時、スノーホワイトが意を決した様子でラ・ピュセルの空いていた方の手を取り、自分の胸に押しつけた。大きくはないが、しっかりと感じられるその柔らかな感触に、ラ・ピュセルの理性がふつ飛びかける。

欲望の『颯太』が、理性の『ラ・ピュセル』に語りかけた。

なあ、ラ・ピュセル。君は僕だよな。

ああ。

じやあ、わかるだろ。小雪を汚したくない、傷つけたくない。だけど同時に、自分の色に染め上げたい、メチャクチャにしてしまいたい、とも思つてしまつ僕の気持ちがつ。わかる。ああ、充分にわかるとも。だが、いいか、怖がらせるんじやないぞ。うん。

ふつ飛ぶというか、理性は欲望と手を結んだようだつた。

結局負けてんじゃねーカ、とか言わないで欲しい。好きな女の子にここまでされて理性を保てという方が無理だ。

「心臓が、爆発するのではないかと思うほど、バクバク鳴っていた。

「小雪、ちょっと手を離してもらつていいかな」

「つ」

「その、このままじや落ち着かないからさ。頼むよ」

「——うん」

不安そうに瞳を揺らすスノーホワイトに優しく語りかけると、彼女は残念そうに手を離した。

手が離れてすぐ、ラ・ピュセルはスノーホワイトの両の頬に手を添えた。

「そうちやん？」

不思議そうに問いかけるスノーホワイトの言葉になにも答えず、ラ・ピュセルは彼女の唇に自分の唇をそつと触れ合させた。鼓動はやはり、スノーホワイトに聞こえてしまうのではないか、と思うほど激しく鳴っていた。

「——」

最初、なにが起こったのかわからない様子だったスノーホワイトが、ゆっくり眼を閉じた。ラ・ピュセルも眼を閉じ、そのまま唇を触れ合せ続ける。

「んっ」

数秒ほどして、ラ・ピュセルは唇を離した。瞳を開いたスノーホワイトの顔は真っ赤で、ラ・ピュセルの顔も、火が出そうなほど熱くなっていた。

スノーホワイトが、眼の端に光るものを見せながらはにかんだ。

「えへへ」

「小雪？」

「そうちやんから、キスしてもらつちやつた」

嬉しそうに言つたあと、スノーホワイトがラ・ピュセルに抱き着いてきた。

ボツ、と躰がさらに熱くなつた気がしたが、なんとか腕を動かし、彼女の躰を抱き返した。

「そのね、不安だつたの。恋人になつたのに、そうちやんなにもしてくれないし」

「うつ、ごめん」

「ううん、わたしの方こそごめんね。わたしのこと、大切にしてくれてたんだよね」

「ほんとは、勇気がなかつただけかも」

「え？」

「キスとかしようとして、嫌がられたらどうしよう、つてこわがつてたのかも」

言葉の途中で、スノーホワイトに口を遮られた。今度は、彼女の方からキスをされて

いた。

再び数秒ほどキスをしたところで、スノーホワイトが唇を離した。上目遣いにこちらを見上げる彼女の顔はやはり真っ赤で、しかしとても可愛らしかった。

「そうちやんつて、変なところで意気地なしだよね」

「ぐつ」

さらつと言われた言葉が、グサッと胸に突き刺さった。

「結構かつこつけなところあるし」

「がはつ」

「思いこみとか強いし」

「グ、グム～ッ、つて思いこみにに関しては、小雪にだけは言われたくない
「え、なんで？」

「妄想癖がある、つてスノーホワイトのプロフィールにあるだろ」

「うつ」

スノーホワイトが、ごまかすように咳ばらいをした。
ラ・ピュセルの眼を見つめ、顔を赤くしながら再び微笑む。

「でもね、そうちやんは優しくて、いつもわたしのこと気にかけてくれて、いざという時はすつごく頼りになつて。そんなそうちやんのことがわたし、大好き」

「——僕も小雪のこと、大好きだよ」

敵わないな、とラ・ピュセルは思つた。きっと小雪は、自分よりずっと心が強いのだろう。控えめで大人しいけれど、芯が強い。

けれどそれは、ひとりでも大丈夫という意味ではないのだと思う。

恰好つけたがりというのは、その通りなのだろう。ちよつと前までは、恰好つけることばかり考えていた。ただ、いまはそこまでではない気もした。

いや、それとも少し違う気がした。恰好つけた言葉を言つたりするのではなく、ほんとうにかつこいいやつに、自分が理想と思い描く魔法少女『ラ・ピュセル』のように、騎士になりたいのだ、と思う。

あの日、颯太がそばからいなくなつて寂しかつた、と泣きながら語つた彼女を見た時から、そんな思いが胸に生まれた。彼女を悲しませない。彼女の笑顔を守りたい。そのためには強く、恰好よくなりたい。そんなふうに思つたのだ。

いま、こうやつている間も、その思いはどんどん強くなつてきていて。彼女への愛しさがますます大きくなつていて。彼女への愛し

もつと、勇気を持たなければ。

スノーホワイトの躰をそつと離すと、その肩に優しく手を置いた。彼女は不思議そうにラ・ピュセルの顔を見上げてくる。

もう一度、キスしたい。さつきより深いキスを、君としたい。
視線で、熱く、そう訴える。

〔――〕
それが伝わったのだろう。スノーホワイトはモジモジとしたあと小さく頷き、そつと
瞳を閉じた。

ドキドキしながら、ゆっくりと顔を近づけていく。

お互いの鼓動が、聞こえそうな気がした。

唇が触れ合おうとした瞬間、スノーホワイトが眼を開き、顔を横にむけた。

〔――〕

嫌だつたのか。

一瞬そんなことを考え落ちこみかけるが、すぐにそう考えた自分を恥じる。

彼女は、颯太を好きと言つてくれ、いまも受け入れる仕草を見させてくれたのだ。その

彼女を疑うことは、してはいけないことだ。

おそらく、困った人の心の声が聞こえたのだろう。

そう考へると、固まつたままのスノーホワイトの視線の先に顔をむけた。

〔――〕

困っている人たちが、いた。

帰つたとばかり思つていたトップスピードとリップルが、空から困つたようにラ・ピュセルたちを見ていた。

『』

誰ひとり、なにも言えず、気まずい空氣のまま時間だけが過ぎていく。
どうにかしなければ、とラ・ピュセルは意を決した。

「や、やあ、トップスピード、リップル。ぼくた、いや私たちにまだ用事でも？」
平静を装つたつもりだつたが、危うく普段の喋り方になりかけた。トップスピードが
なにかに気づいたように、眉をピクリと動かしたように見えた。

トップスピードが、困つたように頭を搔きながら口を開いた。

「んー、いや、そのな。ちょっとこの四人でチームでも組んでみねえか、つて思つてさ。
そんで、思い立つたが吉日っていうし、Uターンしてきただけど」

「え」

「いや、忘れてくれ。馬に蹴られたくねえし。まあ、なんだ、とりあえず時と場所は考
えるようにならよ、二人とも」

最後は楽しそうに笑いながら言われ、ラ・ピュセルは思わずスノーホワイトの方に顔
をむけた。同じタイミングでこちらをむいたスノーホワイトの瞳と見つめ合うかたち
になり、顔が熱くなつた。

「チツ」

「ハハハツ」

リップブルが舌打ちし、トップスピードが楽しそうに笑い声を上げた。

「まつ、誰にも言わねえから、心配すんな」

その言葉を受け、ラ・ピュセルたちが彼女たちの方に顔をむけると、トップスピードはワインクをしてから箒のむきを変え、さつきも行つた方向にむかつて、再び飛んで行つた。

トップスピードたちの姿が見えなくなり、改めてスノーホワイトと見つめ合う。

「えーっと、か、帰ろうか、スノーホワイト?」

「う、うん。そうだね、ラ・ピュセル」

さつき自分たちがやろうとしたことを思い出してしまい、ラ・ピュセルがぎこちなく声をかけると、スノーホワイトもギクシャクしながら答えてきた。

帰る途中、動搖していたスノーホワイトが屋根から足を踏み外し、ラ・ピュセルが咄嗟とっさにお姫様抱っこで彼女をキャッチしたのを道行く人に見られたりもしたが、それは特に気にすることではない。

* * * * *

ラ・ピュセルとスノーホワイトの衝撃的シーンを見てしまった帰り道、うしろにいるリップルから、妙に不機嫌そうな空気をトップスピードは感じた。

正面をむいたまま、トップスピードは問いかけた。

「どうしたよ、リップル。不機嫌そうだな？」

「別に」

「あれか。二人がキスしようと見たせいか？」

「チツ」

答える気はない、ということなのだろう。舌打ちからは、拒絶の響きがあつたようと思えた。

リップルは、魔法少女たちの目撃情報をまとめた『魔法少女まとめサイト』で、スノーホワイトのページを見ていることが多かつた。いろいろと思うところがあるのだろう、とトップスピードは思つた。

ため息をついたり、頭を振つたりしていたリップルが、口を開く気配があつた。

「あの二人が」

「ん？」

「あの二人が、レズだつたとは」

幻滅、というか、見たものが信じられない、とでも言いたげなように思えた。
その言葉に、ラ・ピュセルとスノーホワイトの様子を思い出す。

「レズ、ねえ」

「なんだ？」

「いや、レズってどういう意味だっけ？」

「は？」

「いいからさ、どういう意味だっけ？」

なに言つてんだこいつ、とでも言わんばかりの空気がうしろから漂つてくるが、気にせず答えを促すと、いぶかげ訝し気なリップルの声が聞こえた。

「女の、同性愛者のことだろ」

「だな」

「うん？」

なにが言いたいんだ、とでも言いたそうな雰囲気が伝わってくるが、トップスピードはそれに対してなにも言わなかつた。

最近、『竜騎士』と『白い魔法少女』、つまりラ・ピュセルとスノーホワイトと一緒に目撃されることが増えていた。そしてその目撃情報の中で目につくのが、なんだか妙に仲良く見えるという二人の話だった。もともと仲はよかつたが、なんだか距離が近く

なつて いる感じがあつた。

トップスピードも、二人の関係はレズとかそういうしたものなんだろうか、とちよつと思つたりもして いたのだが、今日会つてみて、考えを改めた。

「多分、レズじやねえと思うぞ」

「キスしようとして いてか？」

「それでも多分、レズ、じやあないな」

「——？」

リップルはやはり意味がわからぬようだつたが、それも無理はないとは思ふ。そもそも、こんなことを考へる者の方が少ないのである。

多分、ラ・ピュセルの正体は男だ。

発想が飛躍して いるかもしれないが、そう考へれば、今までの彼女の反応にもいろいろと納得がいく。

さつきラ・ピュセルは、私たち、と言う前に、僕たちと言おうとしたのではないだろうか。自分を僕と言う女がいないわけではないし、トップスピードも一人称は俺だ。しかし、そんなふうに考へて見てみると、ラ・ピュセルの雰囲気は、女性のものではなく、男性のものに近い気がするのだ。

また、トップスピードはスキンシップとして、肩や背中、時には尻を叩いたりとボディ

タツチすることが多く、時にはハグもする。ラ・ピュセルにやつた時もあつたのだが、そ
ういった時、彼女は慌てることが多かつた。

特にハグの時、ラ・ピュセルは顔を真っ赤にして、躰が固まつていたほどだ。
こういうことに慣れていないのか、とその時は思つていたのだが、いま思えば、女性
とのスキンシップが恥ずかしかつたのではないだろうか。

もしそななら、かたちとしては騙されていたものになるのだろうが、特に怒りのよう
なものはなかつた。

スケベ根性丸出しで行動していたなら、怒りも覚えただろうし、リップルやほかの魔
法少女たちに言うことも考えただろう。しかしラ・ピュセルは、どちらかといえば申し
訳なさげというか、罪悪感らしきものを顔に浮かべることが結構あつたように思えた。
それにスノー ホワイトから、ラ・ピュセルがなにかに悩んでいるという相談を受けた
時、良心の呵責かしゃくに耐えているような感じだつた、という話も聞いていた。おそらくそれ
も、そのあたりのことでの悩んでいたのではないだろうか。それを考へると、彼女を追い
詰めるような行為はさすがに酷というものだろう。

あと、スノー ホワイトがいるのだから特に問題はないだろう、というのもある。ラ・
ピュセルはかなり眞面目であるようだし、スノー ホワイトのことを大切にしていること
も見て取れるので、そのスノー ホワイトに任せておけば大丈夫だろう。

思えば、スノーホワイトとそんな仲になつたから、顔つきが違つて見えたのかもしない。自分もそうだつたが、恋とは得てして人を変えるものだ。男子三日会わざれば刮目して見よ、という言葉もあるのだし、きっとそういうことなのだろう。

男が魔法少女に成れるのか、という疑問もなくはないが、成れないと言い切ることもできない。トップスピードも、もとの姿とは大きく違つているのだ。

トップスピードの本名は『室田つばめ』^{むろた}といい、年齢は十九歳で、外見も年相応だ。髪は栗色で、ひと房の三つ編みにしてまとめてある。

最も違うのは、お腹だつた。つばめのお腹には、愛する夫との子供が宿つてゐる。もうじき三ヶ月になる。不思議なことに、変身しても、お腹に子供がいるという状態は受け継がれないのだ。しかし変身を解けば、つばめは元通り妊婦である。

学はないので理屈だったことは言えないが、魔法少女への変身は、躰が変質しているのではなく、ほかの躰と入れ替えられているような感じなのかもしれない。

そんなふうに躰そのものが変わつたから、性別が変わつても不思議はないだろう。

「」

リップルは、うしろでまだ煩悶^{はんもん}しているようだつた。

「リップル」

「なに？」

「まー、なんだ。あの二人は好き合つてゐみたいだしよ」

「好き合つてゐなら、やつぱりレズじゃないか？」

「そこんところはあんま深く考えんな。とにかく、あまり変な眼で見てやるなよ？」

「わかってる。魔法少女として、ちゃんと活動してゐる一人だからな」

妙に素直に受け答えしてゐるように感じるのは、きっとまだ動搖してゐるせいなのだろう。

さつきラ・ピュセルたちにチームを組むことを持ちかけようとした時、リップルからは反対されていた。されたのだが、ひとつ思うところがあつて、とりあえず話だけでもしてみようとリップルの反対を押し切つて引き返したのだ。

理由は、リップルと、お腹の子供のことだつた。

もともとつばめは、じつとしてるのが苦手な性格だ。魔法少女になつたのは八ヶ月近く前だが、それからずつと続けてゐる。妊娠が発覚した時は驚いたが、お腹の子供は問題ないため、安全には気をつけてゐるもの、魔法少女として活動するのをやめることはなかつた。

不謹慎な言い方ではあるが、つばめにとつて魔法少女活動は、世のため人のために働き、マジカルキャンディーを集めるという『遊び』だ。

いつだつて遊ぶ。遊ぶとは心に余裕を持つことであり、食べるため働くたり、生き

るために生きるのとはまた違つた、つばめなりの『生き方』だった。昔もいまも、年を取つてからも、その生き方を変えるつもりはない。一応願掛けとして、トップスピードがぶら下げている御守り袋には、交通安全と安産祈願の御守りを入れてあつた。

魔法少女が許されるのは、小、中学生、ギリギリで高校生ぐらいまでだろう。十九歳の人妻はさすがにアウトだ。

魔法少女として選ばれた時、最初に頭に浮かんだのはそれだつた。もうちょっと若い娘に譲つてやつてくんない、とファヴにまず言つたのだが、そのあと鏡に映つた自分の姿に、Good job、と魔法少女になることを承諾し、魔法少女トップスピードとなつたのだ。

いまは落ち着いたが、つばめは高校時代まで、レディースチーム『燕無礼樓』^{エヌブレス}の頭を張つていた、いわゆる不良少女だつた。たつた五人の、チームとも言えないほど小さなチームだつたが、つばめたちが住み、トップスピードたち魔法少女たちが目撃されるN市において、引退するまで最速を謳われていた。

夫とはじめて出会つたのは、つばめが小学生のころ、彼の一家が隣の家に引っ越してきた時だ。彼にはつばめと同い年の妹がいて、その妹とつばめは仲良くなつた。つばめは昔から素行が悪く、彼にとつては、妹を惡の道に引きずりこむ惡ガキにしか見えなかつただろう。つばめも彼のことは、なにかと口うるさい友人の兄、としか思つていな

かつた。

それがいつのころからか、好きになつていて。

そしていまは結婚し、子供もできて、刺激を感じさせる魔法少女生活に、それによつて出会つた友だちもいる。幸せをおうか謳歌うそふしていると言つていい。

ただ、ちょっと心配だつたのは、その友だち、リップルのことだつた。リップルは、トップスピードのことを友だちとは思つてないかもしけないが、トップスピードは彼女を友だちだと思つていて。それで充分だ。

リップルは、とつつきにくい感じではあるし、喧嘩けんかつ早いところはあるものの、受け答えはなんだかんだでちゃんとしるし、なにより魔法少女として人助けを積極的に行う、優しいやつだ。本人は、人助けをするのはマジカルキャンディーを集めるためだ、と嘯くが、そのために街の問題などを調べたりしてまで、人助けをすることはしないだろう。

そんないいやつではあるのだが、彼女は人と関わりたがらない。それが、トップスピードには心配だつた。

ふたりというのはいいものだ。楽しい時は二倍楽しめ、苦しい時は半分で済む。遊び仲間がいるからこそ、『遊ぶ』のは楽しくなる。

いつだって、つばめの隣には誰かがいた。それは友だちであり、仲間であり、家族だ。

『燕無札棲』^{エンブレス}のメンバーたち、夫、リップル。そんな誰かがいてくれるから、楽しく過ごしていいけるのだ、とつばめは思っている。

リップルと組んだのは、彼女が危なつかしかつたというのが理由だつた。付き合つているうちに、優しいいいやつであることもわかり、一緒に魔法少女活動をするのもどんどん楽しくなつていつた。

しかし、もう半年もしたら、魔法少女として活動するのは難しくなるだろう。お腹の子供がいるのだ。そして子供が産まれたら、優先しなければならないのは、その子のことになる。『遊ぶ』のをやめる気はないが、だからといって自分の子供を蔑ろにすることだけは、絶対にしたくない。愛する夫とともに望んだ、愛する我が子なのだ。

だがトップスピードが魔法少女活動を休止したら、リップルはひとりになつてしまふだろう。だから、リップルをひとりにさせないために、ほかにも仲間を、友だちを作りつかけを作りたかつたのだ。

気が早いと言われればその通りだが、なら、いつ言えばいいんだ、と言えることでもある。なら、思いついた時に言っておく方がいいだろう。そう思つたのだ。

おせつかいと言われても構わない。友だちを心配することの、なにがいけないというのか。

リップルはスノーホワイトのことを気にかけていたようだし、スノーホワイトも、彼

女の相棒であるラ・ピュセルも、しつかりと魔法少女活動をしている。頼むのなら彼女たちだろう、と思つた。

まあ、二人の関係に関しては誤算だつたわけだが。さすがにあそこまで甘つたるい空氣を醸し出す二人と、チームを組もうぜとは言いにくい。

どうしたものか、とちよつとだけ悩み、やめる。考えこむのは趣味じやない。ふとしたひょうしに、いい考えが浮かぶことだつてあるだろう、と思つた。

「まあ、いまはいいか」

「なにがだ？」

「いや、こっちのことさ。飛ばすぜ、しつかり掴まつてろよ、相棒」

「ああ。つて相棒じやないっ」

「ハハハッ、ほんと、おまえさんはツンデレだねー」

「チツ」

いつもの調子に戻つてきたリップルに笑い声を上げ、ラピッドスワローの速度を上げる。本気を出せば音速も軽く超え、現代の戦闘機以上のスピードも出せるが、いまはそこまで出すことはない。

風を受け、移り変わる景色を楽しみ、振り落とされないようトップスピードの腰に回したリップルの腕の温かさを感じながら、トップスピードたちはホームに飛んで行つ

た。

森の音楽家、現る

今日も今日とて鉄塔の上で待ち合わせる。お互いの家はわかっているわけだし、直接迎えに行つてもいいとは思うのだが、こんなふうに落ち合う場所を決めて相手を待つといふのも、なかなか捨て難いものがあつた。

「ふんっ」

待つてゐる間ラ・ピュセルは、最近の日課となつてゐる、剣の素振りを行なつてゐた。長さも幅も、常のものよりずっと長く大きくしたそれを、何度も振り上げては振り下ろすことをくり返す。

闘う機会があるかどうかはわからないが、鍛えておくに越したことはない。魔法少女という存在が実在するのだから、ほんとうに異世界からの侵略者がいてもおかしくはないだろう。いや本氣でいるなどと思つてはいないが。

いずれにしても、強くなりたいという思いは大きかつた。よく憶えてはいらないのが、妙な夢を見た気がするのだ。

なにかに追い立てられるような得体のしれない焦燥感が、心のどこかにあつた。

「ふうっ」

いつたん素振りをやめ、息をついた。

素振りには慣れてきたとは思うのだが、効果がどれだけあるのか、ラ・ピュセルにはよくわからなかつた。いや、もしかしたら、まつたく意味がないのかもしれない。そんなことを思つてしまふ。

そもそもラ・ピュセルは、格闘技や武術の経験などない。やつていたのはサッカーバカリで、格闘技の知識などは、漫画やアニメなどのものしかないのだ。

それを恥ずかしいとは思わないが、鍛錬の指針になるものが無いというのは、やはり効率が悪いと言わざるを得ない。明確なヴィジョンがなければ、迷いが生まれるものだ。現に、いまもそうだつた、

誰か、その手のことで師事してくれる人はいないだろうか。

まず考えるのは、N市内にいるほかの魔法少女たちのことだつた。ラ・ピュセルとスノーホワイトも含め、十五人いる。その中で、荒事にむいており、強くなるための指標を示してくれる者はいるだろうか。

「やつぱり、ワインタープリズンかなあ」

パツと思いついたのは、ラ・ピュセルが最も世話になつたと言える魔法少女、シスター・ナナと、そのパートナーであるヴエス・ワインタープリズンの二人だ。

シスター・ナナは、ラ・ピュセルが魔法少女になつた時、教育係になつてくれた魔法少

女で、言つてみればラ・ピュセルの師匠のようなものだ。シスター・ナナはラ・ピュセル同様に役を作りこむタイプで、そういった意味でも師匠のようなものだつた。

ヴエス・ワインタープリズンは、魔法少女になつた順番から言うとラ・ピュセルの弟子になる。彼女も、シスター・ナナが教育係だつたのだ。と言うよりも、シスター・ナナが彼女を魔法少女にした、と言えるようだ。魔法少女としての彼女たちはパートナー同士だが、プライデーでも彼女たちは付き合つてゐるらしい。女同士のはずなのだが、まあそういう関係もあるのだろう。

シスター・ナナの恰好は修道女をモチーフにしている、はずなのだが、ノースリーブでかつスカートには深いスリットが入つており、胸は豊満。さらにはその胸をベルトで強調し、白いストッキングをガーターベルトで吊つてゐる。ラ・ピュセルの恰好も大概ではあるが、彼女の衣装も負けず劣らずの工口さであつた。『シスター』とはいつたい、といろいろな意味でラ・ピュセルを悩ませる。主に、その強調された胸や躰のラインが。スノーホワイトには秘密だが。

ヴエス・ワインタープリズンの方は、一見するとロングコートを着た麗人にしか見えない魔法少女であり、N市の魔法少女の中では数少ない、露出の少ない魔法少女だつた。見知った魔法少女たちのほとんどは、なぜか妙に露出度が高い。具足はともかく、下半身の衣装が水着か下着にしか見えないラ・ピュセルが言えたことではないが、彼女た

ちの恰好は、ラ・ピュセルに疚しい気持ちを抱かせそうになるものだつた。

例えはトップスピードは、空を飛ぶにもかかわらず、スカートが短い。その裾がなにかと風に舞い、スカートの中身が見えてしまうのではないかとドキドキヒヤヒヤさせられる。ボディタッチも多く、肩や背や、はては尻まで叩かれることもあつたし、それどころかハグされたり、肩を組まれた時もあつた。頭の中が真っ白になつたものだ。

リップルも、肩に腿に臍に、と露出度は相当なものだつた。事故で彼女のお腹を触つてしまつたこともあつたが、それもあつてあのコンビは、ラ・ピュセルにとつて少々危険なコンビと言えた。

危険な魔法少女と言えば、カラミティ・メアリという魔法少女がいる。恰好もそうちが、そのままの意味でも危険な魔法少女だ。

外見は十七、八歳ぐらいで、表面積の狭い豹柄のビキニに、風が吹けばめくれあがつてしまいそうな薄く短いスカートを身に着け、テンガロンハットを被るという、西部劇に出てくる女ガンマンと言つた風情の姿をした彼女は、無法者としか言いようがない行為ばかり行なつており、どこかの暴力団に雇われているという話すらあつた。

それは噂でしかないが、事実無根の話だとも思えなかつた。かなり好戦的な人物であることは間違ひなく、シスター・ナナがヴエス・ワインター・プリズンとともに彼女の縄張りに入った時、有無を言わさず闘うことになつたらしい。ヴエス・ワインター・プリズ

ンのおかげで特に怪我をすることはなかつたらしいが、シスター・ナナも無茶をする、と思つたものだつた。

リップルもちよつとやり合つたことがあると、トップスピードから聞いたことがあつた。新人であるリップルをトップスピードが指導している時に現れ、ちよつと話したところで突然撃たれたのだという。その時リップルは、カラミティ・メアリが撃つてくる拳銃の弾丸を刀で弾くなどという芸当をしたらしいが、もし弾けなかつたらどうなつていたことか、想像するのは難しくなかつた。

清く、正しく、美しく。そんな魔法少女を理想とし、目標とするラ・ピュセルからすれば、彼女の在り方は決して許せるものではない。

ラ・ピュセルも一度、柄の悪い男たちを従え、どこかに行こうとするカラミティ・メアリを見たことがあつた。なにか良からぬことをする気ではないか、咎めるべきか、と迷い、その恰好と大きな胸に気をとられ、考えこんでいる内に、彼女たちはいなくなつていた。自分はなにをやつているんだ、と思わなくもなかつた。

ワインタープリズンは、その中では安心、だと思つていた。実際には、ギャップのもたらす破壊力がすごかつた。以前どこぞのビルの屋上で、ラ・ピュセル、シスター・ナナ、ワインターパリズンの三人で雑談していた時のこと、にわかに雨が降つてきたことがあつた。ワインターパリズンはためらうそぶりも見せず、即座にコートをシスター・ナナ

の頭にかけたのだが、普段コートに覆われているウインター・プリズンの躰は、セーターや通してもわかる均整のとれた肉付きに、かたちのよい胸回りが見て取れ、ラ・ピュセルは慌てて眼を逸らすことになった。

ほんとうに安心と言えば、ルーラという魔法少女と、彼女が率いている四人の魔法少女たちだ。内ひとりはカラミティ・メアリ並みに危険ではあるが、ほかは見ていて微笑ましい気持ちにさせられる。

ルーラは、宝石が散りばめられた、裾が床を引きずるほど長く光沢のある立派なマントを纏い、手にはこれまた立派そうな杖、というか王錫しゃくを持ち、パーティに出るかのような長手袋を嵌め、頭にはティアラという、姫や女帝、貴族然とした恰好をしている魔法少女だ。

トップスピードいわく、ルーラはかなり口が悪いが、面倒見はいいとのことだった。

ラ・ピュセルも何回か会つたことはあるが、閉口するぐらいには口うるさい相手だった。ラ・ピュセル、颯太は体育会系統の、いわゆる理不尽な先輩からの理不尽な命令などが嫌いだ。積極的にかかる気はないため別にいいが、彼女とはうまく行く気がしなかつた。

意外と言つては失礼かもしれないが、彼女の魔法少女としての目撃談はそれなりにあるので、魔法少女としてはしっかり活動しているようだつた。それもあって、カラミ

ティ・メアリに対するような嫌悪感はない。ないが、口うるささもあって、あまり近づきたい相手でもなかつた。寸胴、貧乳体型で露出度も低く、見て微笑ましくはあつても、特に楽しいものでもないし、というのはどうでもよろしい。

ルーラチームのメンバーである双子の天使、ピーキー・エンジエルズは、文字通り天使のような外見をした二人組で、ユナエルとミナエルという名前だ。見た目は十歳前後で、背中から生えている翼はそれぞれ一翼という、比翼の天使とでも言つた感じだつた。二人とも非常によく似ており、どつちがユナエルでどつちがミナエルかはつきりわからぬ、というか教えて貰つても結局わからなくなりそうな気がするほどだ。

片方がなにかしら言うと、お姉ちゃんマジクール、などともう片方が追従することが多く、姉妹仲はかなりいいらしいことが窺えた。^{うかが}ほんとうに姉妹なのか教えて貰つたわけではないが。

あと微笑ましいのは、たまという魔法少女。名前はどちらかというと猫っぽいが、犬のような魔法少女だ。チャットでの挙動や受け答えが犬を思わせるものが多く、失礼な言い方かもしれないが、女の子と言うよりは、賢くてかわいらしいペットの犬と言う方が近く思える。ルーラチームとは、こんなメンツなのだ。

しかしルーラチームにはひとり、危険な魔法少女がいる。名は、スイムスイム。白いスクール水着を着て、水泳用ゴーグルを首から下げている。それだけならただの泳者と

いつたところだが、頭にはヘッドホンをつけ、腰のうしろに謎の円盤が数枚取り付けられていた。

白いスクール水着という、なかなかニッヂな恰好をした魔法少女だが、チャットでアバターを見る分には、特別なにかを思うことはなかった。危険なことに気づいたのは、以前、魔法少女として人助けをした時のことだ。道に迷っていたお婆さんの手を引いて案内してあげたのだが、そこはルーラの縄張りだつた。運悪くルーラに見つかってしまい、無許可で私たちの縄張りに入るなど叱られたのだ。

説教はだいぶ長かつたが、叱られた言葉は憶えていない。彼女の隣に立つスイムスイムから眼が離せなかつたためだ。

大きかつた。すごく、大きかつた。それに気を取られ、ルーラの説教は頭に入らなかつた。そしてカラミティ・メアリを見た時に考へてしまつたのは、スイムスイムどちらが大きいか、ということだつた。互角か、いやメアリが勝つか。そんなことを思つた。

それはともかく、あのチームに教えを乞うのはいろんな意味で無理だろう、と結論づけるしかなかつた。

残る魔法少女は、幼稚園児か小学生かというぐらいの体格で、ロボットのような、といふかロボットにしか見えない外見をした魔法少女、マジカロイド44。パジャマ姿で

他人の夢に出てくる、基本的に魔法少女チャットでばかり姿を見かける、ねむりん。目的情報が非常に少なく、ラ・ピュセル自身は魔法少女チャットでしか見たことがない、森の音楽家クラムベリー。これで全員だ。十六人目の魔法少女が生まれるとか生まれたとかの噂もあるが、まだはつきりとした話は聞いていない。

マジカロイドの魔法は一風変わっていて、未来の道具とやらが出せるというものだ。未来の道具というだけあつて、現代の技術では到底作り出せそうにない物が多いらしいが、その道具は日替わりで、なおかつ一日しか使えないのだという。たまに、その道具をほかの魔法少女に売りつけに来る時もある。ラ・ピュセルも何度か話を持ちかけられたことがあつたが、値段は一万円という、中学生がポンと出せる金額ではないこともあつて、買つたことはなかつた。一日しか使えないというのもためらう理由だが。

ねむりんは、一度だけラ・ピュセルの夢に出てきたことがあつた。といつても、夢の中だというのに気持ちよさそうに寝っていて、起こすのもどうかなとじつと見ていただけだつたが。

だが、すぐに彼女の危険さに気づいた。チャットのデフォルメキャラではどうということがなかつた、上半身がパジャマで下半身に靴下のみという恰好は、リアル等身で見るとかなり破壊力が高かつたのだ。パジャマの裾から伸びる素足はやたら艶めかしく、さらには時折、ねむりんが寝返りを打つ。そのたびに大変なことになりそうになり、や

はり起こした方がいいのだろうか、と慌てているうちに、眼が醒めた。

クラムベリーは、チャットでしか見たことがないということもあって、よくわからな
い。チャットで見る限りでは、創作の世界でなにかと使われるエルフのような尖った耳
に、薔薇ばらを衣装に散らした感じの恰好だ。ねむりんのようによく人と話すわけでもな
く、ただ楽器を弾いているだけのため、人となりもよくわからなかつた。

「まあ、いいか。ワインター・プリズンに頼んでみよう」

「なにを？」

聞き慣れた声がした。特に慌てることなくふりむく。近づいてくる気配は感じてい
たためだ。思つた通り、スノーホワイトがいた。

「やあ、スノーホワイト、こんばんは」

「こんばんは、そうちやん」

「そうちやんはやめなさいって

いつものやり取りをして、笑い合う。

ラ・ピュセルに変身している時、感覚はかなり鋭敏になつていて。ある程度離れたと
ころにいる人の息遣いや、気配のようなものも感じ取れるぐらいだ。動かずにじつとし
ていれば、なおのことだ。

「それで、ラ・ピュセル。ワインター・プリズンに頼むつて、なにを？」

「いや、なんていうか、強くなりたくってね。ウインターブリズンに組み手でもして貰おうかなつて思つてさ」

「強く？」

「うん。なんだか、強くならないとまずいことになりそうな気がしてさ」

困った声が聞こえるというスノーホワイトに対しても、あまり隠し事はしないようにして、しようと思つてゐる。どうしても隠さなければならないことに関しては、母のことを思い浮かべてどうにかする。

「——？」

意識の端に、なにか引っかかった気がした。誰かがラ・ピュセルたちを見ている。そんな気がした。ラ・ピュセルがここに来た時から、なにか違和感はあつたのだが、なんのだろうか。

とりあえず意識の端に留めておく程度にして、スノーホワイトに注意を戻す。
「でも、ラ・ピュセルは強いし」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、ほら、ほんとうに魔法少女つてものがいるんだから、異世界からの侵略者とかもほんとうにいるかもしねないしさ」
「うーん」

スノーホワイトが苦笑した。ラ・ピュセルも苦笑する。

「とにかく、強くなつておきたいんだ」

「——そつか」

「うん、だから」

「そつか。コートを脱いだ時のウインター・プリズンの躰付きとか胸回りとか見たくて行つて来る、つてわけじやないんだ?」

「——」

ゆつくりと、ラ・ピュセルは空を見た。今日は曇つている。月の光は雲を通してうつすらと見えるが、星はほとんど見えなかつた。

再び、スノーホワイトの顔を見た。ニコニコとしているがなんとなく、漫画で見られるような怒りマークが二、三個ほど見えたような気がした。

「あの、スノーホワイト、さん?」

「強調された躰のラインがとか、トップスピードにハグされたとか、あの二人は危険だとか、カラミティ・メアリとスイムスイムの胸はどつちが大きいかとか?」

「ごめんなさい!」

間髪入れず、ラ・ピュセルは土下座した。

抱き締めたり、キスしたり、恥ずかしくはあつたがいろいろして、なんとかスノーホワイツに機嫌を直して貰い、その後に今夜の魔法少女活動を行い、終えた。

「送つてくれてありがとう、ラ・ピュセル」

「私は、君の騎士だからね」

「大きい方が好きだけど？」

「ごめんなさい」

クスクス、とスノーホワイトが笑つた。

「浮氣とか、しないでね？」

「しないって。その、説得力ないかもしれないけど」

「大丈夫。信じてるから」

「うん。ありがとうございます。おやすみ」

「おやすみ」

スノーホワイトが帰つていく。やがて、姿が見えなくなつた。

「こんばんは」

「ああ」

背中から声をかけられた。慌てずにふりむく。見覚えがある姿だつた。チャットでのデフォルメキャラしか見たことがなかつたが、それのリアル等身ならこんな感じになるだろう、と思わせる姿の女性。魔法少女は十代半ばの外見が多いが、彼女は二十歳前後に見えた。

「森の音楽家、クラムベリー？」

「はい。こうしてお目にかかるのははじめてですね、ラ・ピュセル？」

「くんと頷く。

「それで、私になにか用でもあるのか。鉄塔にいた時から見ていたようだが？」

「気づいていましたか。さすがですね」

クラムベリーは、どこか楽しそうだつた。なにか危険な感じがするのだが、よくはわからなかつた。

「気づいていてスノーホワイトを帰したのは、なぜですか？」

「私とスノーホワイトのどちらに用があるのかわからなかつたからな。スノーホワイトの方を追うようだつたら、こちらも追うつもりだつた」

「ふむ、なるほど」

「それで、もう一度訊くが、なんの用だ？」

「ひとつ、手合させしてみませんか、ラ・ピュセル？」

「なに？」

「私はこれでも腕に覚えがありましてね。強い相手と闘いたいのです。それに、強くなりたいんでしよう、ラ・ピュセル？」

「そういえば、N市の魔法少女の中で、最古参はクラムベリーだと聞いたことがあつた。

目撃情報は少ないが、ひよつとしたら世間に知られないように活動しているのかかもしれない。

いまいちよくわからない相手ではあるが、ここまで自信満々に言うのだから、実力はあるのだろう。

「わかつた。私としても願つたりだ。手合わせ願おう」

「ええ」

「場所を変えよう。もう少し闘いやすいところに行こう」

「わかりました」

第七港湾倉庫。あのあたりなら、夜なら人気はないだろう。
建物の屋根から屋根を移つて移動する。

到着した。クラムベリーは、余裕をもつて着いて来ていた。
むき直り、剣を抜き放つた。

クラムベリーは、じつと佇んでいる。
「構えはとらないのか？」

「お気になさらず。本氣で来なさい、ラ・ピュセル」
「むう、と唸り、剣を鞘に入れ、構えた。
おや、とクラムベリーが呟いた。

「手加減のつもりですか？」

「いや、というより、抜き身で相手を攻撃するのに抵抗があるだけだ。どちらかといふと、こちらの事情だ」

「なるほど。そういう理由ですか。悪くない判断ですね」

「では、いくぞ！」

「来なさい、ラ・ピュセル」

吼え、ラ・ピュセルは跳躍した。

負けた。

アスファルトの冷たさを背中に感じながら、仰向けのまま夜空を見る。今夜の天気のようすに、ラ・ピュセルの心も曇っていた。

負けた、どころではない。惨敗、いや、勝負にもならなかつたと言つていい。

こちらの攻撃はことごとく躱され、すさまじい速度の拳や蹴りが時々飛んでくる。ほとんど避けられず、何度も立ち上がりはしたもの、それで終わりだった。

ラ・ピュセルとしての躰は頑丈で、身体能力もかなりのもののはずなのに、これほどまでに相手にならないとは。

躰が問題なのではない。ラ・ピュセル自身が、不甲斐なさ過ぎるのだ。
情けなさ過ぎて、涙も出てこなかつた。

「なかなかでしたよ、ラ・ピュセル」

「つ、慰めなんてよしてくれ」

声が震えた。視界が滲む。涙も出てこないと思つたが、そんなことはなかつた。顔を見られないように、うつ伏せになつた。

「悔しいですか、ラ・ピュセル？」

ギリッと歯を食いしばり、うつ伏せになつたまま頷いた。
「ならば、私の弟子になつてみませんか？」

「つ！」

涙を拭い、顔を上げる。クラムベリーは、穏やかに微笑んでいた。

「確かにあなたは、私の相手になつたとは言い難い。ですが、まつたく見込みがないとは思えませんでした。あなたにその気があるのなら、私が鍛えて差し上げましょう。いかがです？」

「なぜ？」

「なにがですか？」

「なぜ、私にそんな申し出を？」

「言つたでしよう。私は強い相手と闘いたいと。あなたが強くなつて私に挑んでくれるのであれば、私は強敵との闘いを愉しめるということです。あなたのためというより、

自分のためですよ。いかがですか?」

スノーホワイトの顔が頭に浮かんだ。強くなりたい。彼女を守るために。彼女を悲しませないために。弱いままでは、彼女を悲しませることになる。そんな気がするのだ。

躰の痛みを我慢して立ち上がり、礼をした。

「私の方こそ、お願ひします。私を鍛えてください、師クラムベリー」

「師、ですか。なかなか悪くありませんね。では、これからよろしくお願ひします、ラ・ピュセル」

「はい。よろしくお願ひします!」

クラムベリーが、満足そうに頷いた。

* * * おまけというには長い氣がするおまけ（暴走してます。あまり深く考えずにご覧ください）* * *

負けた。

アスファルトの冷たさを背中に感じながら、仰向けのまま夜空を見る。今夜の天気のよう、ラ・ピュセルの心も曇っていた。

負けた、どころではない。惨敗(さん)、いや、勝負にもならなかつたと言つていい。

こちらの攻撃はことごとく躱され、すさまじい速度の拳や蹴りが時々飛んでくる。ほとんど避けられず、何度か立ち上がりはしたものの、それで終わりだつた。

ラ・ピュセルとしての躰は頑丈で、身体能力もかなりのもののはずなのに、これほどまでに相手にならぬことは。

躰が問題なのではない。ラ・ピュセル自身が、不甲斐なさ過ぎるのだ。

情けなさ過ぎて、涙も出てこなかつた。

「私の勝ちですね、ラ・ピュセル。では」

クラムベリーが、ラ・ピュセルの上体を起こした。顔が近づいてくる、というかすでに間近に迫つていた。思つてもみなかつた行動に、思考が遅れる。

浮氣とか、しないでね

大丈夫。信じてるから。

「つ!?

スノーホワイトの声が聞こえた気がした。痛む躰を無視し、反射的にクラムベリーの

顔を手で止めた。

クラムベリーが不満そうな表情を浮かべ、ラ・ピュセルの手首を掴んだ。

「なんですか、ラ・ピュセル？」

「なんですかもなにも、あなたこそなにをするつもりだ、クラムベリー!?」

「キスしようとしたのですが?」

「なんで!?!」

「あなたは、私に負けましたよね?」

「あ、ああ」

それは確かにたので、腕に力をこめたまま頷いた。

「敗者は勝者のものになる。それがルールでしよう?」

「いつどこで誰が決めた!?!」

「たつたいま、ここで、私が」

「さらつと言うな!!」

「質問は以上ですね。では」

「グ、グムヽツ」

クラムベリーの力が強くなつた。ラ・ピュセル以上の力かもしけない。躰が万全でも押さえこまれそうな気がした。

手首を掴まれた腕に力をこめる。びくともしない、というわけではないのだが、あちらの方が強いのは間違いなかつた。クラムベリーの顔と、ラ・ピュセルの顔の間には、もうなにもなかつた。

クラムベリーの顔が、近づいてくる。

顔を背ける。そむクラムベリーが馬乗りになるようにして、ラ・ピュセルの躰に跨つた。手を、地面に押さえつけられた。

「や、やめろ、クラムベリー」

「そうちやん」

「つ!?

スノーホワイトの声が、聞こえた。背筋が凍える。

「そうちやん。信じてたのに」

「ち、違うんだ、スノーホワイト!」

顔と眼を動かし、あたりを探つてみるが、スノーホワイトの姿はなかつた。気配も感じられない。

ふと、クラムベリーの名前を思い出した。森の音楽家。

「まさか、いまの声は」

「なかなかいい勘をしてますね。そうです。私の魔法です。私は『音』を操れましてね。

スノーホワイトの声で言葉責め。いかがです?」

「最低だ!?

「まあ、バレてしまつてはしようがありません」

「関係ないけどね」

「本気で最低だ!?

途中でスノーホワイトの声になり、心臓がバクバクと鳴つた。

「そうちやん。そんな嫌がらないで」

「やめろーっ!」

嫌なはずなのに、妙な気分になつてくる。背徳感のようなものが、どこかにあつた。その気持ちを、必死でねじ伏せる。

駄目だ。やめる。スノーホワイトを、小雪を裏切りたくないんだ。そう思つても、耳をふさぐこともできない。

ふつと気づく。

「ちょ、ちょつと待て、なんで、そうちやんつて」

「私、耳はいいもので」

「鉄塔で盗み聞きか!?」

「はい」

「とことん最低だな!?」

「まあ、いいじやありませんか。それより、そろそろ素直になつたらどうです。嫌よ嫌よも好きのう」

クラムベリーが言葉を止め、ラ・ピュセルから跳び退つた。^{すさ}直後、ラ・ピュセルの頭の方向から、なにかが突き出された。

「なぎなた薙刀?」

咳いたが、ちよつと違う気がした。刃の部分は薙刀ほど反りがなく、大きな出刃包丁といつた感じだつた。

薙刀らしき物が、視界から外れていく。仰向けのまま、顔を上げるようにして、薙刀が引つこんでいつた方を見た。

スノーホワイトが、いた。

「つ!?

慌てて立ち上がるとして、躰の痛みに膝を突いた。

「そうちやん。無理しないで

「スノー ホワイト、その、私は」

「大丈夫。疑つたりなんかしない」

「あ、ああ」

スノーホワイトが、儂げな微笑みを浮かべた。どこか雰囲気が違うような気がした。表情が薄く、無機質な感じを受ける。ただ、無理にそうしているふうにも見えた。

「クラムベリー」

「スノーホワイト、私に挑むつもりですか？」

スノーホワイトが、薙刀をちよつとだけ持ち上げ、構えた。返事代わりだろうか。
「ちよつと待つぽん！」

魔法少女育成計画のマスコットキャラであるファヴが、マジカルフォンからいきなり飛び出した。

「ファヴ？」

「魔法少女同士の闘いにもルールがあるぽん。出でよ！」

「つ!?」

ファヴの言葉とともに、なにかが地面からせり上がってきた。

白く、四角く、それなりに大きな物。四隅にはコーナーポスト。

「リ、リング？」

プロレスやボクシングの試合場として使われる、リングだつた。

「さあ二人とも、リングに上がるぽん！」

「ちょ、まつ」

「はあーっ」

「とおーっ」

「跳んだ!?」

困惑するラ・ピュセルを気にせず、スノーホワイトとクラムベリーが跳躍し、リングに上がった。

もう、わけがわからなかつた。

「えー、これよりー、スノー ホワイトＶＳ森の音楽家クラムベリーの試合をはじめるぽん」と

「なんのノリだよ!!」

「魔法少女同士の闘いは、魔法少女レスリングで決着をつけるものぽん！」

「レスリング!? 武器持つてるけど!?」

「コスチュームの一部なら合法ぽん。あと、盛り上がりれば問題ないぽん

「雑だなあ!!」

ファヴガ、マイクらしき物を装着した。

「赤ーコーナー、スノー ホワイト、魔法少女強度ー、九十五万パワーーーー

「高つ!? って魔法少女強度つてなんだよ!!」

「あ、ラ・ピュセルは九十六万パワーだぽん」

「さらに高い!? 平均値はいくらなんだ!?」

「青ーコーナー、森の音楽家クラムベリー、魔法少女強度ー、一千万パワ～～」

「高すぎだろ!?」

「大丈夫だよ、ラ・ピュセル。魔法少女強度はあくまでも目安。魔法少女魂を燃やせば覆くつがえせるっ」

「つていうかノリがわからないんだけど!?」

「魔法少女魂、ですか。フフツ、私も魔法少女なのですよ、スノーホワイト?」

「だけど、あなたはほんとうの魔法少女じゃない」

「ほう?」

「ほんとうの魔法少女つていうのは、清く、正しく、美しいもの。だからあなたは、ほんとうの魔法少女じゃないっ」

「フフ、言つてくれますね。ですがそれでは、あなたもほんとうの魔法少女とは言えませんよね、スノー ホワイト。いえ、『魔法少女狩り』?」

「つ」

「いや、あの、誰か説明してくれないか。この状況はなんなんだ?」

「どこか陰のあるスノー ホワイトの雰囲気や、彼女が『魔法少女狩り』などというなにやら物騒な呼ばれ方をしたのが気にならないわけではないが、状況がさっぱりわからな

い以上、先にそれを説明して欲しい。

「細かいことは気にするなほん、ラ・ピュセル。時間魔法少女たちの手によるものだとでも思つておけばいいほん」

「時間魔法少女つてなんだよ!?」

「ちなみに、ラ・ピュセルは正義魔法少女、クラムベリーは悪魔魔法少女、いまのスノーホワイトは残虐魔法少女にカテゴライズされるほん」

「ちよつと待て、なんでスノー ホワイトが残虐なんだ！ 彼女も正義魔法少女だろ!? 意味はよくわからぬけど！」

「正義魔法少女は、主に魔法少女としての力を人助けに使う魔法少女たちのことほん。悪魔魔法少女は魔法少女としての力を自分の心の赴くままに使い、大胆に振る舞う者たち。あと、人助けよりも自分の力を磨くことに腐心する、つまりは完璧な強さを目指す求道者的側面の強い魔法少女を完璧魔バーフェクト法少女と呼ぶほん。それで残虐魔法少女と言うのは、正義魔法少女の一派ではあるけど、その正義のためなら苛烈、残忍、惨酷と呼べる行いも辞さないという者たちのことほん。彼女たちは真冬の太陽と同じで、照らしても暖めはしない。そんな魔法少女たちだほん」

「だから、なんでスノー ホワイトが」

「それは、これから行うであろうスノー ホワイトのファイスタイルを見れば、自ずと理

解できるばん。業務用消火器とか」

「消火器!」

「その通りですよ、ラ・ピュセル。さあ、スノーホワイト。あなたの全知全能をもつて私に挑んでくることです。ラ・ピュセルの前だからといって躊躇しては、私に勝つことなどできませんよ」

「そんなこと、言われなくともわかつてゐる」

「ほう?」

「スノー、ホワイト?」

「わたしの魔法は、昔とは変わってしまった。ラ・ピュセルと一緒に魔法少女として活動してた時と、どこか違うものになってしまった。魔法だけじゃなく、わたし自身も」

表情を浮かべないスノーホワイトの声は、感情を感じさせない、平坦な声だった。ほがらかに笑うはずの彼女が、そんな顔で、そんな声を出していることに、胸が締めつけられるような痛みを覚えた。無表情のはずのスノーホワイトの瞳から、陰とともに、言いようのない悲しみが感じられた。

「だけど、いまはそんなこと気にしてられない。ラ・ピュセルを助けるチャンスが来たんだから。この胸の苦しみも、悲しみも、後悔も、全部を力に変えて、ラ・ピュセルを助けてみせる」

「スノーホワイト——」

スノーホワイトの言つてることは、ラ・ピュセルにはよくわからなかつた。ただ、彼女が苦しんでいることだけは伝わつてくる。

不意に、スノーホワイトを抱き締めてあげたくなつた。事情はわからないが、ラ・ピュセルはスノーホワイトの騎士なのだ。彼女が苦しんでいるなら、少しでもその苦しみを取り除いてあげたい。たとえそれが、気休めであつても。

痛みを無視して、一步踏み出した。

「スノー——」

「ラ・ピュセルがいなくなつたら、いろいろこじらせて鉄面皮になつて、悪い魔女を狩ることしかやることなくなつちやうし。なんか修羅雪姫とか言われるし」

「ホ
w h y?」

スノーホワイトの呟きに、思わず足が止まつた。さつきと比べて声に感情がこもつてゐる気がした。

「だいたいそうちやんも、なんであんなにかつこいいこと言つてくれたのに死んじやうの。鬪つてるところスキップされるとか、さすがに酷いでしょ。『あちら側』の方は鬪うところに加えて意地も見せてたし、かつこよかつたけど、なんだかわたしが全然いいところないし、アリスのところとか諸々含めてズルい女にしか見えないし。いや確かにそ

う思われてもしようがないかもしないけど、それを後悔したからこそ、その後なのに。リップルと組み手で締めとか、なんかフォローも弱いし。フレデリカのところとか、フレイム・フレイミーと闘つてるところとか見せてくれてもよかつたじやない。いやそこまで行かなくても、飛行機に捕まつて移動してるところで締めとかでも、インパクトは充分だつたはずなのに」

やさぐれた空気を撒き散らしながら、スノーホワイトがブツブツと呟いている。

「フフフツ、それを言つたら私なんて、求めるのは強敵です、とか格闘ゲームのキャラみたいな強者感溢れる台詞を言つておきながら、やつてること実質的に初心者狩りだし、不利な状況で闘おうとしないところとか、行動の端々から小者臭漂つてるよね、とか言われてますよ、スノーホワイト」

「それこそ言われてもしようがないでしょ」

クラムベリーの言葉をスノーホワイトがバツサリ切つた。クラムベリーがちよつとだけ傷ついた顔になつたが、気を取り直したように笑つた。

「まあここはひとつ、イメチエンを狙つておねショタはどうかと結論づけましたので、ラ・ピュセルをものにしようかと」

「絶対にやらせない」

「なんでそこでおねショタ!? というかなんで私なんだ!?」

「女だらけの中に男がひとり。その男性を中心としたドタバタを書くというのは、よく執られる手法ですよ、岸辺颯太さん」

「なんでバレてんの!?」

白黒饅頭なマスコットが、ラ・ピュセルにむき直つた。

「それはファヴだ、ぽん」

「それは私だ、みたいに言うな！ つてバラすなよ!?」

「マスター、つまりクラムベリーから、ちよつと恋人とか作つてみたいので手頃な相手はいませんか、とか訊かれて、ラ・ピュセル、スノーホワイト、クラムベリーの三角関係とか、面白そうな見世物になるんじやないかつて思つたから教えたぽん」

「最低な理由だ!! つていまどんでもない秘密が暴露されなかつたか!? マスターつてなんだよ!?」

「マスターはマスターだぽん。まー、なんていうか、悪いことをすると報いが返つてくるし、シャレで済む方向に舵を切つた方がいいんじやないかなあつて思つたんだぽん」「ある意味僕はシャレで済みそうにないけどな!?」

三角関係など、漫画とかでしか見たことはないが、いま目の前で繰り広げられるスノーホワイトとクラムベリーの睨み合いを見ては、シャレで済む気がしない。修羅場というのも生ぬるい気がする。

「両手に花だぽん。嬉しくないぽん?」

「僕が好きなのはスノーホワイトだからな!」

「そうちやんつ」

勢いに任せて言うと、スノーホワイトが顔を赤らめ、クラムベリーが不敵な笑みを浮かべた。

「なるほど。略奪愛というのも燃えますね」

「そこはあきらめてくれませんかね!?」

「お断りします。恋愛とは、交戦の一種だという言葉を聞いたことがあります。恋敵がたきを

避け、目的の人物を陥おとすものだと」

「ほんとうに闘つてどうするんですか!?」

「あらゆる障害を乗り越え、自らの持つ武器でハートを射止いとめるのが恋愛というものでしよう?」

「腕力で射止めるのはなにか間違つていないのでしようか!?」

そういう人たちもどこかにいるかも知れないが、ラ・ピュセルはそういう人種ではない。

む、とクラムベリーが眉をひそめた。少し考えるそぶりを見せたあと、ひとつ頷く。「わかりました。魔法で射止めましょう」

「どちらにせよ物騒な攻撃が来るとしか思えませんが!?」

「むつ」

クラムベリーが、不機嫌そうに顔をしかめた。

「あれも駄目これも駄目。あなたは私にどうして欲しいですか、岸辺颯太さん?」「まず僕を狙うのをやめてくれませんか!!」

「嫌です」

「わがままか!?」

「仕方ないぽん。クラムベリーは九歳の時、魔法少女試験で事故に見舞われて、そこから精神的に成長できていないんだぽん」

「え?」

「面白くなりそうだつたから特にその手の教育はしなかつたけど、情操教育ぐらいはしつかりやつておくべきだつたかもしれないぽん」

「つて、おまえのせいいか!?」

直感が閃き、ファヴを捕まえようとするが、手がすり抜けた。実体ではないのだ、と
いうことを思い出す。

「後悔はないが反省はしているぽん。だから許して欲しいぽん」
「まったく反省の色が見えない!」

「いや、人死にが出るようなことはやつてないぽん」

「クラムベリーが^あ遭つた事故つて、おまえのせいか？」

「黙秘するぽん」

「おい」

ファヴが、コホンと咳払いのようなものをした。

「とりあえずラ・ピュセルたちには、ラブコメのようなドタバタを期待して^るぽん」

「やつぱり最低だ!?」

「こればっかりはやめられないぽん。さあ、そろそろ試合開始ぽん」

「え」

リングを見る。スノーホワイトもクラムベリーも、お互いだけを見ていた。

「いや、だから、まつ」

「試合開始ぽん!!」

ゴングが、高らかに鳴った。

刮目^{かつもく}せよ！ ラ・ピュセルをめぐる頂上戦争！ だぽん。

黒いアリス

床に、女性が仰向けに横たわっていた。マタニティドレスを着ていて、お腹が膨らんでいる。妊婦だ。年齢は、十代後半ぐらいだろうか。髪は、三つ編みにしてまとめてあつた。

そこには、相棒がいるはずだつた。『御意見無用』のコートを布団代わりに躰にかけ、横たわった相棒がいるはずだつた。

肩口から胸にかけて、大きな傷があつた。斬られていた。血が滲んでいた。すでに、出血は止まつているようだつた。穏やかな表情で眼を瞑つぶつており、ほんとうに眠つているかのように見えた。

床に膝を突き、女性の手を握つた。冷たい。脈もない。なんの反応も、なかつた。最低でも、あと半年は生き延びなきやいけないんだ。相棒が言つていたその言葉が、頭に浮かんだ。

なんで、なんで、なんで、なんでなんでなんで——。
なにに対するものかわからない、ただ、そんな言葉だけが、頭を埋め尽くしていた。ひとつだけ、わからることがあつた。

たつたひとりだけの、大切な友だちを失った。

そこで、眼が醒めた。

* * *

細波華乃が魔法少女『リップル』になつたのは、およそ二ヶ月前のことだつた。

幼稚園から中学生のころまでは、理不尽に対しでは暴力で反抗する、というスタンスで大抵の問題を解決してきたのだが、高校生ともなるとそうはいかない。

母親が連れてきた、五人目の自称義父に尻を撫でられ、その屈辱を拳で返し、荷物をまとめて家を出た。狭いアパートで、ひとり暮らしのはじまりである。生活のため、将来のため、バイトをクビになるわけにはいかないのだ。暴力沙汰などもつてのほかである。

求めたのは、学校なりバイト先なりで嫌な思いをした時の気晴らし、ストレス解消の手段だつた。そこで手を出したのが、『魔法少女育成計画』だつた。

趣味に金をかけるのは愚か者のすることだ、というのが華乃の持論だ。ただでさえ高校生のひとり暮らしである華乃の生活は苦しく、あらゆる出費を切り詰める必要があるのだ。完全無課金のソーシャルゲーム『魔法少女育成計画』は、華乃の求めるものとしてピッタリだつた。それまで持つていた二つの趣味、漫画の立ち読みと、図書館で読書に、新たな趣味が加わつた瞬間である。スマートフォンは低価格化に成功し、携帯電話

業界を席捲しているため、スマフォを対象にしたソーシャルゲームの数は非常に多いが、言葉通りの完全無課金など、これぐらいのものだつた。

ゲーム経験はまつたくなく、これがはじめてプレイするゲームとなつたわけだが、なかなか面白いものだつた。学校でゲームの話をする男子などを内心で小馬鹿にしていた華乃も、認識を改めたぐらいだ。もつとも、これ以外のゲームに手を出したことはないため、ほかのゲームも同じように面白いかどうかは知らないが。

家にテレビがあつた、幼いころを思い出す時もあつた。記憶の中の華乃是、テレビの中の魔法少女と一緒に笑つていて、そういうえば自分にも、魔法少女が大好きだつた時期があつたんだなあ、と柄がらにもなく感傷に浸る時もあつた。

他人との対戦や協力プレイは、面倒くさいという思いや鬱陶うつとうしさが先に立つため、C P U相手の対戦およびストーリーモードを進めていた。なるべくなら、人と関わり合いになりたくないのだ。華乃是人との会話が、人間が苦手だ。群れたがる者、群れたことで強くなつたつもりでいる人間が、華乃是嫌いだつた。

一日三十分という制約を自分につけていたため、ゲームの進行自体はかなり遅いが、楽しんでプレイしていた。変化があつたのは、はじめてから一週間が経つたころだつた。画面内でフワフワ動くだけだつたはずのマスコットキャラ『ファヴ』に、話しかけられた。

なにかのイベントでも起るのかとボタンを連打していたら、眩い光に包まれ、気がつくと魔法少女になっていた。

『魔法少女育成計画』で設定していたアバターである、忍者っぽい外見だつた。和服と水着を足して二で割つたようなコスチュームに、それに似合うように設定した、黒い髪、切れ長の目、薄い眉。こうして実際に魔法少女になつてみると、魔法少女としては地味だなと思った。

忍者としてはお約束の赤い襟巻えりまき、大きな手裏剣型しゆりけんの髪留めは鉄色で、それ以外は黒系の色でまとめてあつた。襟元や袖口には手裏剣やクナイが縫い付けられていて、転んだら怪我しそうだな、などと思った。

最初に変身した時は、姿見の前でポーズなどもとつてみた。ニッコリと笑顔を浮かべたり、チユツと投げキツスをしたり、いろいろとやってみたが、どれもそれなりにさまになつてているような気がした。少なくとも、本来の姿である『細波華乃』としての姿では似合いそうにないポーズも、似合つているように思えた。華乃是同年代の女子の中ではかなり体格がよく、それどころか男性の平均よりも身長が三センチほど高い。躰もがつちりしている。『リップル』の姿は、身長、体重、体格、どれもが女性的なものになつていた。

『リップル』という名前は、苗字である『細波』を英訳してつけたものだつた。ゲーム

でやつてている時は特に気にならなかつたが、実際にその姿になつてみると、和風の姿に洋風の名前で、いさかチグハグな印象を受けた。アバターの変更は可能かとファヴに訊いてみたが、魔法少女になれるようになつてからは不可能と言われた。なんとも言えない気持ちになつた。

魔法少女として選ばれた者には、人助けをして欲しいのだと言われた。人助けには特に興味はなかつたが、この魔法少女としての美しい外見や、人並み外れた力、行使できるだろう魔法には、強い魅力を感じた。

すぐに魔法少女としての活動がはじまるかと思つたら、そうではなかつた。まずは、先輩魔法少女からレクチャーを受けなければならなかつた。人間関係というものが面倒くさく鬱陶しいから、『魔法少女育成計画』に手を出したというのに、その『魔法少女育成計画』でも人間関係に悩まされるのかと、いんうつ陰鬱な気分になつた。

ともあれ、その先輩魔法少女が、トップスピードだつた。リップルのトップスピードに対する第一印象は、馬鹿っぽい、だつた。

一見すると魔女っぽい外見、はいいとして、『御意見無用』と背中に刺繡されたコートに、バイクのような風防やハンドル、マフラー・ブースターが取り付けられた箇を見ては、ああ、馬鹿なんだな、と思うしかなかつた。想定していた先輩魔法少女のランクを一段階下げたものだつた。一人称が『俺』で、馬鹿笑いを上げるという最初の挨拶で、ラ

ンクはさらに下がつた。

諸々の説明が終わり、トップスピードが篝に跨つて夜空に消えたあと、舌打ちをしながらファヴを呼び出した。

ああいつた説明役は誰が決めてるの、と訊くと、親切な魔法少女が自主的に行なつているとの答えが返ってきた。トップスピードの説明はほかの魔法少女の三倍時間がかかるけど、それだけ丁寧に教えてくれるものだという言葉を聞き、押しつけがましい親切だつたということと、必要以上に長かつたという説明に、リップルは舌打ちをした。トップスピードの評価は、『馬鹿っぽい先輩』から、『先輩っぽい馬鹿』に変更された。

なぜかその後も、トップスピードはちよくちよくリップルのところに来た。舌打ちをくれたり、もう来なくていいと直接告げても、ツンデレだね、で片付けられた。話が通じない相手だと認識し、ほとんど相手をしないようにしたが、それでもトップスピードは気にせずリップルのもとに来て、話すだけ話して帰っていく。いつのころからか、タッパーに料理を入れてやつてくるようになつた。意外なことに、料理はかなり美味かつた。

そんなこんなで魔法少女として活動していたら、いつの間にかトップスピードとコンビを組んでいることになつていた。

黒いな。新たに生まれたという十六人目の魔法少女を見た時、最初にリップルが思つ

たのは、そんなことだった。

エプロンドレスというのか、そんな感じの衣装を身に纏つており、白い兔のぬいぐるみを抱いている。なんとなく、童話『不思議の国のアリス』の主人公、『アリス』を思い出した。もつとも、配色はほぼ黒一色で、無表情にこちらを見つめるその姿からはどうにも辛氣臭さが拭えない。また、魔法少女の例に漏れず美少女ではあるのだが、ほかの魔法少女に比べて肉付きがやや悪く感じ、猫背気味で、眼の下には濃い隈くぼがあり、どこか淀んだ瞳に、白を通り越して青白い肌と、だいぶ不健康そうに見えた。その雰囲気のためか、ぬいぐるみを抱いている姿も、可愛らしさよりはどこかホラー染みた様相を感じさせた。

そこまで見てとつたあと、露出度に關してはともかく、配色に關しては自分も大差ないことに思い至つた。なにに対するものかわからぬ舌打ちを、リップルは心の中でした。

トップスピードが箒の高度を下げ、地上に降り立つた。

リップルは箒から降りると、十六人目の魔法少女に近づき、むかい合つた。トップスピードは、リップルたちからちよつと離れた位置で、こちらを見守るように佇んでいた。

なんの因果か、リップルが彼女の教育係をすることになつてしまつたのだ。いや、なんの因果もなにも、リップルの相棒、いや自称相棒が勝手に決めてしまつたのだが。

十六人目の魔法少女とお互に見つめ合つたまま、少しばかり時間が経つた。

「なあ、あんたら、そろそろどつちが喋ろうぜ？」

トップスピードが、呆れたように言つた。誰のせいでこんなことになつたと思つていい、と横目で彼女を見て、リップルは舌打ちしそうになつた。

心中でトップスピードにむけて舌打ちすると、目の前の魔法少女に視線を戻した。

「私は、リップル」

「ハードゴア・アリスです」

十六人目、ハードゴア・アリスが静かに言つた。

それで、お互いに言葉が止まつた。そのまま数秒経つたところで、トップスピードが呆れた様子で口を開いた。

「ようやく口を開いたと思つたら、それで終わりかよ、あんたら。つたくもう、ほら、リップル。魔法少女の先輩として、教えなきやならねえことがあるだろ？」

「わかつてる」

舌打ちこそしないように気をつけてはいるが、声の不機嫌な感じは隠しきれなかつた。しかしハードゴア・アリスは、特に気にした様子もなくリップルの顔を見つめている。

トップスピードにむけて軽く指差すと、ハードゴア・アリスが彼女に視線をむけた。

「とりあえず、あっちの魔女っぽいのは、トップスピード」

「はい」

「魔女っぽいって」

トップスピードがどこか複雑そうに言つたが、リップルは構わなかつた。ハードゴア・アリスも気にせず頷いていた。

手を下ろしたところで、ハードゴア・アリスがリップルに顔をむけた。再びお互いに顔を見合う。

「魔法少女の仕事は、人助け。人助けをして、マジカルキャンディーを増やす」

「はい」

ハードゴア・アリスが頷いた。なんとなくだが、さつきより反応が強かつた気がした。魔法少女としての人助けに興味があるのだろうか。そんなことを考えるも、必要以上に干渉する気はなかつた。

前にトップスピードから教わつたことを思い出す。トップスピードの説明は、ほかの魔法少女の三倍ほど時間がかかつたがその分、丁寧に教えるものだつたという。リップルとしては、ほかの魔法少女と同じぐらいの時間で説明を終えたいところであるが、そんな説明をすると、トップスピードにいろいろ口出しされるような気がしたので、結局彼女と同じような説明をすることにした。

魔法の端末の説明。^(マジカルフォン)

まずは、魔法の端末の説明。といつてもこれは、機能はともかく操作方法はそこらのスマートフォンと変わらないものだ。自分が受けた時は、その程度のものをやたら大仰に言うトップスピードに苛立つたものだが、それはどうでもいい。

ハードゴア・アリスに、パーソナルデータを開いて確認させてみる。なんとなく、画面を見てちょっと落ちこんだように見えたが、リップルは特になにも言わなかつた。リップルも、パーソナルデータで確認した自分の性格に、『人間嫌いで暴力的』などと書かれてあつて、自覚はあるが腹が立つたものだつた。

「魔法は、ゲームとは違つて、ひとりにつきひとつだけ。増えたりすることはないらしいけど、額面通りの効果しか発揮されないというわけじやないらしい」

「はい」

ハードゴア・アリスが頷いた。多分、相槌を打つたような感じなのだろうと思つた。自分が言えたことではないが、口下手なのだろう。複雑ではあるが、心のどこかに親近感のようなものがあつた。

リップルの魔法は、『手裏剣を投げれば百発百中だよ』というもので、それは能力や魔法というより技術の類ではないのか、と思えるものだ。あまり魔法少女っぽくも忍者っぽくもない、とがつかりしたものだつた。別に忍者に思い入れがあるわけではないが、地味だなと思つた。分身とか火遁とかいろいろあるだらうとも思つた。

ただ、『手裏剣を投げれば』と説明に書いてあるものの、効果は手裏剣に限つたものではなかつた。リップルが投げれば、なんでも百発百中になるのだ。正確に言うと、リップルが『狙いをつけて』手で投げた物は、それがなんであつても、その目標としたものに飛んで行く。見当違ひの方に投げても、軌道を変えて飛んで行くのだ。これなら、確かに魔法と言えるだろう。地味だが。

もつとも、外的要因で防がれるという是有る。投げた物が弾かれたりすると、そこで魔法の効果が失われるようだ。またリップルの持つ手裏剣は、アバターに備え付けられた装備のようなものであるらしく、いくつも取り出すことが可能だ。手裏剣だけなく、クナイも同様だ。

背中には忍者刀も背負つており、これも武器として使用できる。以前、カラミティ・メアリに撃たれなつたが、彼女の撃つた拳銃弾を弾ける程度には強度もあつた。ほかにも、袖口に小刀が仕込んであつたりする。

『どんなケガをしてもすぐに治るよ』

「ん？」

「私の魔法のようです」

「そう」

「はい」

ハードゴア・アリスの言葉にリップルが頷くと、彼女もまた頷いた。

「いや、あんたら、なんつーか、こう、明るく話せとは言わねーけど、もうちょっとリアクションとろうぜ——」

トップスピードが、なにやら頭を抱えていた。気にせずに説明を続ける。

一般人に正体を知られてはいけない。

魔法少女のルールや力を一般人に話してはいけない。

はくだつ

この二つの決まり事を破つたら、魔法少女としての資格を剥奪されることになる。
週に一度チャットがあり、強制参加ではないものの、重要な連絡があつたりすることもあるため、なるべく参加した方がいい。

一部の魔法少女は繩張り意識が強いため、ほかの魔法少女の担当地区に行く場合は注意すること。

「カラミティ・メアリの城南地区と、ルーラの西門前町には、行かない方がいい。カラミティ・メアリはだいぶ危険なやつで、いきなり撃たれる可能性もある」

「はい」

「ルーラは、そこまで危険なわけじやないらしいけど、かなり口うるさいらしい」

「はい」

こんなところだろうかと、ちよつと考える。トップスピードを横目で見ると、苦笑し

ながらも親指を立て、サムズアップしてきた。OKということだろう。内心で、ほつと胸をなでおろした。

「つ、チツ」

思わず舌打ちしていた。ハードゴア・アリスが首を傾げる。

「ごめん、気にしないで」

「はい」

視線を逸らしながら言うと、ハードゴア・アリスはやはり素直に頷いた。

舌打ちしてしまったのは、まるでトップスピードに頼るようなことをしてしまった自分に、気づいたからだ。

トップスピードが、近づいてきた。

「おう、お疲れさん、リップル。ハードゴア・アリスもお疲れさん。魔法少女としてのルールとか、ちゃんとわかつたかい？」

「はい」

「よし。ほかに気になることがあつたら、なんでも聞いてくれていいぜ？」

「では、ひとつお聞きしたいことがあるのですが」

「ん？」

『『白い魔法少女』』を、ご存知ですか？」

ハードゴア・アリスの言葉に、二人で顔を見合させた。

ハードゴア・アリスの方に二人で顔を戻す。トップスピードが、口を開いた。

『白い魔法少女』つてーと、スノーホワイトのことか?』

「学生服みたいな衣装の」

「ああ、そんな感じだな」

「どこにいますか?』

「担当地区は俱辺ヶ浜だけど。つて待つた待つた』

それまでのボーッとした挙動が嘘のような食いつきにリップルが呆気にとられている、ハードゴア・アリスが踵きびすを返した。トップスピードが慌てて止める。

ハードゴア・アリスが、ふりむいた。

「スノー ホワイトの担当地区に行くのは、駄目ですか?』

「いや、んなこたねーけど、なんでスノーホワイトのところに?』

「それは」

ハードゴア・アリスがちょっとだけ顔をうつむかせ、顔を上げた。

「お礼が、言いたくて

「お礼?』

「はい』

声は小さなものだつたが、強い光が瞳に灯つていて、^{とも}うに見えた。

うーん、とトップスピードが声を洩らし、よし、と頷いた。

「んじや、ちよつくら行つてみつか」

「え？」

「俺の箒に乗つて行けばあつという間だぜ。さー、乗つた乗つた！」

トップスピードが箒に跨またがつた。はじめて、ハードゴア・アリスが困つたようにリップルを見た。

ため息をつき、リップルは頷いた。

「こいつは、いつもこんな感じなんだ。デリカシーがなくて、お節介を焼きたがる」「ヒデエ言いようだなあ」

リップルの言葉に、トップスピードが苦笑した。まつたくツンデレなんだから、などとでも思つているのだろう。なんとなく舌打ちする。

「嫌だつたら、断つていいと思う」

「はい。いいえ」

ハードゴア・アリスが言い、トップスピードに近づいた。箒を見て、トップスピードの顔を見た。乗せて貰うこととしたようだ。

トップスピードが首を傾げ、得心がいったように頷いた。

「ああ。箒に跨つて、俺の躰に掴まつてくれ」

「はい」

言われた通りハードゴア・アリスが箒に跨り、トップスピードの腰に手を回した。
今日は、ひとりでパトロールするか。

「ほら、リップル」

そんなことを考えていると、トップスピードが急かす^せような口調で言つた。

「なに?」

「なに、じゃなくつてさ。ほら、リップルも乗りな」

「私は、いい」

「そう言うなつて。一応、ハードゴア・アリスの教育係はリップルなんだからさ」
チツ、と舌打ちして、渋々と近づく。いつもリップルが座つている、トップスピードのすぐうしろは、ハードゴア・アリスが座つている。仕方なく、ではない当然ながらハードゴア・アリスのうしろに座り、彼女の腰に手を回した。
「よーし。二人とも、しつかり掴まつとけよ!」

「はい」

「チツ」

すでに馴染んでしまつた浮遊感を覚え、風を感じた。空。ハードゴア・アリスが乗つ

ているためか、普段よりスピードが抑えめのような気がした。

「どうよ、俺の魔法は？」

「すごく、速いです」

「おうよ。だけどよ、もつと速くできるぜ？」

「はい」

「ようし、んじや、行くぜ！」

トップスピードが楽しそうに笑い、いつもリップルとパトロールしている時と同じぐらいのスピードになつた。ハードゴア・アリスの表情は変わつていないが、顔をあらゆる方向にむけている。どこか高揚しているようにも見えた。

しかし、二人ではなく三人で乗つ正在と、マジカロイド44の魔法の道具『魔法の箒性能強化マシーン』なるもので、トップスピードが暴走した時のことを思い出した。トップスピードいわく、箒のスピードだのパワーだの小回りだのが向上し、かつ飛ばしあくなつてしまつたらしい。あれほどに死を感じたことはない。マジカロイドもそうだつたのか、暴走が終わつたあと、安堵から二人で抱き合つたほどだ。

「チツ」

「おいおい、どうしたんだよ、リップル。いきなり不機嫌そうな舌打ちなんかして」「マジカロイド」

「えっ、あー、いや、マジカロイドの件は悪かつたつて。現役時代を思い出しつちまつたんだよ」

「チツ」

「はい」

「大変だつたんですね、とハードゴア・アリスに言われた気がした。舌打ちせず、頷いておく。

「つと、そうだ、リップル。スノーホワイトとラ・ピュセルに、いまからそつちに行くつて連絡しといてくれ」

「なんで私が」

「いや俺、運転中だからさ。いいだろ?」

仕方ない、とマジカルフォンを取り出し、メールする。

文面はシンプルだ。これから新しい魔法少女を連れて、そちらに行く。
少しして、返事が来た。

わかりました。これから鉄塔に戻ります。

返ってきたのは、そんな文面だつた。スノーホワイトからだつた。

「いまは、パトロール中だつたみたい。これから戻るつて、スノーホワイトの方から」「おう。わかつた」

「あの、スノーホワイトは、『竜騎士』とか『黒い魔法騎士』とか呼ばれている魔法少女とよく一緒にいる、という話がありますが」

「うん。そいつが、ラ・ピュセル。あの二人は、コンビを組んでるから」「俺とリップルみたいにな」

「チツ」

「いや、そこで舌打ちすんなよ」

トップスピードがまた苦笑した。

ハードゴア・アリスは、そこで黙りこんだ。スノーホワイトが気になるのだろうことは、さつきの話で見当がつく。しかし、あの二人が一緒にいる時に近くにいるのは、なかなかつらいものがあるのでないだろうか。そんなことを思う。

「まあ、アリスがどうしたいのかはともかく、まずは会つてからだな」

「はい」

トップスピードが言い、ハードゴア・アリスが頷いた。

やがて、鉄塔が見えてきた。近づいてみると、二人の姿はなかつた。まだ戻ってきていないようだつた。

鉄塔の上に降り立つた。箒から全員降りると、トップスピードがマジカルフォンを取り出した。

「着いたぜ、つと」

スノーホワイトたちに連絡したようだつた。

そこまで間を置かず、スノーホワイトから返事がきた。もう少しで着くらしい。

ハードゴア・アリスに視線をむけると、特に表情を変えているわけではないのだが、どこか落ち着かないように見えた。

「大丈夫?」

「——はい。ありがとうございます」

ハードゴア・アリスが、不意を衝かれたようにリップルを見て、お辞儀をした。気のせいかもしれないが、ちょっとだけ微笑んだような気がした。

なんとなく照れくさくなり、視線を逸らした。

「別に、お礼を言われるようなことは、してない」

「ハハハツ、ほんと、リップルはツンデレだよな」

「だからツンデレじや」

「はい」

「いやそこで、はい、って言わないで欲しいんだけど」

「いいえ」

「えー」

ハードゴア・アリスの返事に肩を落とすと、トップスピードが背をむけて肩を震わせはじめた。笑いを堪えているのだということは、すぐにわかつた。

舌打ちしそうになつたところで、近づいてくる気配を感じた。下を覗きこむようにして、あたりを見回す。リップルに変身している時は、感覚がかなり鋭くなつていて、ある程度の距離なら気配を感じ取ることもできた。

鉄塔の方にむかつて来る人影を、見つけた。

「え」

「どうした、リップル？」

「お姫様抱っこ、してる」

「は？」

駆けてくる人影はひとつ。スノー・ホワイトを横抱きにした、ラ・ピュセルだった。

こちらに気づいたのか、スノー・ホワイトがラ・ピュセルに抱かれたまま手を振つてきた。ちょっと恥ずかしそうに見えた。

どう反応していいのかわからず、トップスピードと顔を見合させ、再びスノー・ホワイトたちに眼をやる。

ラ・ピュセルが、走りながらスノー・ホワイトを片手で抱き直した。スノー・ホワイトがラ・ピュセルにしがみつく。

なにをする気かと見ていると、ラ・ピュセルが片手で剣を抜き、その剣を地面に突き立てた。瞬間、ラ・ピュセルたちの姿が大きくなつたように見えたと思ったら、鉄塔より高いところに、ラ・ピュセルたちの姿があつた。地面とラ・ピュセルたちの間を、月の光を照り返すなかが結んでいた。金属的な光沢。ラ・ピュセルの剣だ。

剣を伸ばした。それに思い至つた直後、剣が縮み、空中でラ・ピュセルが片手で器用に剣を鞘に納め、スノーホワイトを改めて横抱きにした。ラ・ピュセルたちの姿が、大きくなつていく。

「つと」

ラ・ピュセルが、スノーホワイトを横抱きにしたまま、リップルたちのそばに着地した。音は多少響いたが、そこまで大きなものではなかつた。

「ごめんなさい、お待たせしました！」

「すまない、待たせたな」

「あー、いや、いきなり押しかけたのはこつちだからな。気にしねーでくれ。それより、なんでお姫様抱つこなんかしてんだ？」

「えつ、いや私の方が足は速いからな。スノーホワイトを抱いても、私の方が速いし」「いや、別におんぶとかでもよかつたんじやねーか？」

『えつ』

トップスピードがからかうように言うと、二人がハタと気づいたように声を上げた。
恥ずかしそうにしながらも、ラ・ピュセルがスノーホワイトを優しく下ろした。

「ゴホン、とラ・ピュセルが咳払いをした。

「それで、その子が新しい魔法少女かい？」

「はい。ハードゴア・アリスです」

「ラ・ピュセルだ。よろしく」

「スノーホワイトです。よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

ハードゴア・アリスが、お辞儀をした。

「それにしても、挨拶回りかい？」

「いや、アリスがスノーホワイトに用があるみたいでよ」

「わたしに？」

「はい」

視線が、ハードゴア・アリスに集まつた。ハードゴア・アリスが進み出る。

スノーホワイトとハードゴア・アリスが、じつと見つめ合う。妙な緊張感が漂いはじめた。

そのまま、十秒ほど経つた。

「なあ、アリス。俺たちがいると言いにくいつてんなら、離れておくけど」
めずらしく、トップスピードが気遣うように言つた。

「いいえ、大丈夫です」

「そ、そうか」

ハードゴア・アリスが深呼吸した、気がした。あまりアクションが大きくないので、そ
んな感じがしたというだけだが。

「その、どうしてもあなたにお礼を言いたくて」

「お礼?」

「はい」

ハードゴア・アリスがスノーホワイトに手を差し出し、掌を開いた。掌には、鍵があつ
た。

スノーホワイトが、二、三度ほど眼をパチパチとさせたあと、なにかに気づいたよう
な仕草を見せた。

「この鍵、もしかして」

「はい。その節は、ありがとうございました」

ハードゴア・アリスが、小さく微笑んだ。

なるほどなあ、とトップスピードが言つた。

「スノーホワイトに助けて貰つて、それでお礼を言いたかつたつてわけか」

「はい」

「でもよ、なんかそれだけつて感じじやない気がしたんだけど」

「それは」

ハードゴア・アリスが言いよどんだ。ちょっとだけうつむき、遠慮がちに口を開いた。
「その、スノーホワイトと一緒に、魔法少女として人助けがしたくて」

「え？」

「それで、白と黒で、綺麗かなつて」

「ああ、なるほど」

トップスピードが、納得したように言った。

ハードゴア・アリスが全身真っ黒の姿なのは、スノーホワイトと並んだ時のことを考
えてのものだつたのか、トリップルも納得した。

「ねえ、ラ・ピュセル」

「ん、なんだい、スノーホワイト？」

「ハードゴア・アリスも一緒に活動していいかな？」

「三人でチームを組むつてことかい？」

「うん」

「もちろん、私は構わないよ。ハードゴア・アリスはどうだい？」

「私は」

すぐに承諾すると思っていたのだが、ハードゴア・アリスはなぜか口ごもつた。思つてもみなかつた反応にリップルは首を傾げた。周囲もそうなのだろう、みんな首を傾げていたが、スノーホワイトがなにかに気づいたように、ハツとした表情を見せた。

ハードゴア・アリスが、リップルを見た。なぜこちらを見たのかわからず、リップルは眼をパチパチとさせた。スノーホワイトも、困ったようにリップルの顔を見ている。リップスピードが、ああ、と納得したように声を上げた。

リップスピードが近づいて来てリップルの肩を抱き、向きを変えさせられた。ともに、背中を三人にむけるような恰好となつた。

リップスピードが肩を組み、リップルの耳もとに顔を寄せた。

「ほら、リップル。あんたからも言つてやらねーと」

リップスピードが、声を潜めて言つてきた。こちらもなんとなく声を潜めた。

「なにをだ？」

「教育係だろ。あと押ししてやれって」

「あと押しして」

「多分、俺たちに気を遣つてるんだろ。結構遠慮する性格みたいだし。な？」

「——わかった」

そう言うと、トップスピードが離れた。ハードゴア・アリスにむき直る。しかし、あと押しと言つても、なんと言えばいいのだろうか。

「好きにすればいい」

「おーい、リップブルさんよー」

トップスピードが、頭を抱えていた。ラ・ピュセルとスノーホワイトも同じだつた。

ハードゴア・アリスは、相変わらずの無表情だが、ちよつとだけうつむいているような気がした。罪悪感のようなものが、ちよつとだけ胸に生まれた気がした。

「その、ハードゴア・アリスは、スノーホワイトと一緒に魔法少女として人助けがしたかつたから、魔法少女になつたんだろ。だつたら、私たちに遠慮することなんてない。スノーホワイトたちもこう言つてくれてるし、言葉に甘えていい、と思う」

「——はい」

ハードゴア・アリスが、お辞儀をした。ちよつとだけ微笑んだ気がした。

なんだか恥ずかしくなり、背中をむけた。トップスピードが苦笑しているのが見えた。

「その、よろしくお願ひします、スノーホワイト、ラ・ピュセル」

「うん。よろしくね、アリス」

「よろしく、アリス」

背中から三人の声が聞こえた。トップスピードが近づいてきて、再びリップルの肩を抱いた。

「おう。よかつたぜ、さつきの言葉」

「チツ」

トップスピードが苦笑し、リップルの肩にちょっとだけ力を入れた。スノーホワイトたちの方にむき直らされるかたちになった。むき直ると、トップスピードが離れた。

スノーホワイトとハードゴア・アリスが話をし、ラ・ピュセルが二人を見守るようにしている。そこに、トップスピードが近づいていった。

「ところでよ、ちょっとだけ腹ごしらえしないかい？」

「腹ごしらえ？」

ラ・ピュセルが首を傾げて言った。スノーホワイトたちも首を傾げている。

トップスピードがタッパーを取り出し、蓋を開いた。今日は煮物のようだ。タッパーは普段よりも大きめの物で、十六人目の魔法少女と会うからと、大きな物にしたのかもしない。

「おう。このトップスピードお手製の料理さ。味は保証するぜ。なにせリップルが頬を緩めるぐらいだからな」

「トップスピード」

「ハハハツ」

余計なこと言うなという意をこめてリップルが咎める^{とが}ようにして言うと、トップスピードが笑い、タッパーと箸を三人に差し出した。

「まつ、とにかく食べてくれ」

「あ、ああ。じゃあ、私から。いただきます」

まずラ・ピュセルが箸を受け取り、おそるおそるといった様子で煮物に箸を伸ばし、口の中に入れた。ラ・ピュセルが、眼を見張った。

「美味いっ」

「ほんとだ、すごくおいしいっ」

ラ・ピュセルに続き、スノーホワイトも言つた。二人とも顔をほころばせている。ハードゴア・アリスも、わずかに頬を緩めているように見えた。

「ほら、リップルも来いよ」

「私は」

「いいから」

スノーホワイトにタッパーを渡したトップスピードが、リップルに近づいて来て手を掴んだ。どうにも振り払えず、一緒にスノーホワイトたちのもとに行く。

リップルも、煮物に箸を伸ばした。いつもながら、出汁がよく染みていて、美味しい。

「美味しいだろ？」

「べつ」

「とてもおいしいですっ」

別に、と言おうとしたリップルの言葉に、笑顔のスノーホワイトの言葉が重なった。
なんとなく、自分の内心まで代弁された気がして、ちょっと恥ずかしくなった。

「トップスピードは、いつも料理を持ってきてるんですか？」

「いつもってわけじゃねーけど、だいたいはそうだな」

「それでリップルは、毎回こんなおいしいものを食べさせて貰ってるのか？」

「おう」

羨ましそうなラ・ピュセルの言葉に、リップルの代わりにトップスピードが頷いた。
舌打ちしようとして、なんとなくできなかつた。自分のペースが乱されている気がした。

「また機会があつたら、食べてみたいな」

「あ、じやあ今度はわたしがお弁当作つてくるよ。トップスピードほどおいしいのは作
れないかもしないけど、どうかな、ラ・ピュセル、アリス？」
「スノー ホワイトの料理か。うん。ぜひ食べてみたいな」

「はい。では、私も作ってきます」

「おー、じやあ、いつそのこと料理持ち寄つて、魔法少女みんなで親睦会でも開いてみるか？」

「あ、いいですね、それ」

「はい」

「いいけど、カラミティ・メアリやルーラもか？」

「ルーラはあれで結構いいやつだからさ、そう煙たがんよ。^{けむ}カラミティ・メアリは、まあ一応」

「チツ」

「いや、リップルがカラミティ・メアリのこと気に入らないのはわかるけどさ、伝えなかつたら伝えなかつたで面倒なことになると思わない？」

「誘われたからつて素直に応じるやつじゃないだろ。それどころか、下手すれば滅茶苦茶にされるぞ」

「まあ、そうかもしけねーけどよ」

よく喋っているのは、やはりトップスピード、スノー・ホワイト、ラ・ピュセルの三人だつたが、時々リップルやハードゴア・アリスにも話が振られた。

ハツヒラ・ピュセルがなにかに気づいた。

「考えてみると、私の方が追加戦士っぽくないか」

「え？」

「あー、確かに。ひとりだけ剣持つて鎧着た魔法少女だもんな。なんかジヤンルが違う気がするな」

「や、やつぱり」

トップスピードが肯定し、ラ・ピュセルが頭を抱えた。

「ですが、スノー ホワイトの相棒は、ラ・ピュセルです」

「アリス？」

「ラ・ピュセルがスノー ホワイトを抱きかかえて来る姿は、とても綺麗でした」

ハードゴア・アリスは、そこで言葉を止めた。トップスピードが笑い、ポカンとした

ラ・ピュセルの背中を叩いた。

「ほら、後輩に気い遣われてんぞ」

ラ・ピュセルが、再びハツとした表情を浮かべた。うつむいて息をつき、顔を上げた。眼に、強い光があつた気がした。

「ありがとう、アリス。そうだな。私は、スノー ホワイトの騎士で、相棒だ。誰が仲間になろうと、それだけは誰にも譲れない」

「うんっ」

スノーホワイトが、顔を赤くしながらも嬉しそうに頷いた。ラ・ピュセルも顔を赤くしていたが、力強く頷いていた。ハードゴア・アリスも、不思議とどこか嬉しそうに見えた。

見ているこつちが恥ずかしくなつてきた。ごまかすようにタッパーを見てみると、料理はほとんどなくなつていた。

頃合いだらう、と思つた。

「トップスピード。今日はもう戻ろう」

「つと、そうだな。アリスは、もうちよつと話してくか？」

「はい。皆さんがよろしければ」

「わたしはいいよ」

「私もだ」

「リップルは？」

「わざわざ聞か――いや、いいと思う」

「はい」

なんとなく言い直すと、ハードゴア・アリスが頷いた。気のせいだろうか、かすかに嬉しそうに見えた。

ちよつとだけ寂しい気がした。きっと、気のせいだ。

トップスピードが箒に跨り、リップルも跨つたところで、ラ・ピュセルが口を開いた。

「そういえば、この前言つてたチームの話だが」

「ん、ああ。あの話か。あれは忘れてくれてもいいんだぜ？」

「でも、いまこうして三人のチームになつたわけだし、いつそのこと五人のチームでもいいんじやないかと思うんだが。ルーラのところもそうだろう？」

「スノーホワイトは？」

「わたしも、ラ・ピュセルと同意見ですけど」

「そうか。リップルはどうだ？」

「私？」

「おう」

問いかけられ、眉をひそめた。ちょっとだけ考える。

「わざわざチームを組むことないだろ」

「そりやまだどうして？」

「トップスピードの箒は、精々三人が限度だろ」

「まあ、スピードは問題なく出せるけど、四人以上になると乗りづれえだろな。下手すりや振り落とされるかもしけねーし」

「スノーホワイトたちは、できれば三人一緒にいいんだろ。チームを組んでもしようが

ない、と思う」

「言われてみれば、確かにそうだな」

ラ・ピュセルが頷いた。

「つて、それだと四人でもひとり余ることにならないか。トップスピードはどうするつもりだつたんだ?」

「あー、いや、悪い、そこまで考えてなかつたわ」

トップスピードとハードゴア・アリス以外の者が、力が抜けたように首をガクツとさせた。

リップブルは、ため息をついた。

「チームはともかく、なにかあつたら助け合う、とかでいいだろ」

リップブルが言うと、トップスピードが弾はじかれたようにふりむいた。眼を見張り、驚いた表情だつた。

なにを驚いているんだ、と思ったところで、助け合うなどという言葉を言つた自分に気づいた。

トップスピードが、笑顔を浮かべた。

「だな。――そんな感じでいいかい?」

トップスピードがスノーホワイトたちに顔をむけて言うと、三人とも頷いた。

そむ

また恥ずかしさを感じ、リップルは顔を背けた。

定位置とも言えるようになつてしまつたラピッドスワローの後部座席で、リップルは風を感じながら月を見上げた。

「いやー、にしてもすげえよな、アリスの根性つづーか執念つづーか」

トップスピードが、感心するように言つた。相槌を打つことはしなかつたが、リップルも同じ気持ちだつた。

ふつと思うことがあつた。

「トップスピード」

「なんだ、リップル？」

「なんで、私に教育係なんてやらせたんだ」

「ああ、それはその、いや、まあ、ほら、リップルも魔法少女として板についてきたしよ、誰かに教える経験を持つてもいいんじやないかって思つてさ」

「――？」

なんとなく、言葉を濁したように思えた。なにかを話そうとして、しかし決心がつかなかつた。なぜか、そんな印象を受けた。

「まあ、とにかく、ちゃんとできてたし、俺も安心したよ」「余計なことを」

「嫌だつたか？」

「つ」

当たり前だ。鬱陶しいし、面倒くさい。そう言おうとしたが、言葉が出なかつた。そういう気持ちは確かにあつたが、ハードゴア・アリスと話している時は、意外と悪くない気分だつた。

ハードゴア・アリスは口下手ではあるが、いい子だと思つた。複雑ではあるが、ちよつとした親近感もあつた。

それに、彼女に付き合つてスノーホワイトとラ・ピュセルのところに行つて、会話して、こういうのも悪くないな、という気持ちが心のどこかにあつた。

自分が、わからなかつた。

群れることが嫌いだつた。群れることで、強くなつたと勘違いしているやつが嫌いだつた。

母が、嫌いだつた。誰かにもたれかかるようにしなければ生きていけない母が、嫌いだつた。母のようにだけはなりたくないと思つていた。

だからなのだろうか、人と関わるのを避けていたのは。

群れないから自分は強いのだと、そう思いたかつたのだろうか。

ほんとうは弱かつたから、誰かと関わるのが怖かつたのだろうか。

なぜかいまは、そんなことばかりが頭に浮かんでくる。

「トップスピード」

「ん？」

「私は、弱いのかな」

「いや、強いだろ。カラミティ・メアリとやり合えるし」

「そういう意味じゃ、ない」

トップスピードの言葉に被せるようにして、言っていた。トップスピードが、前をむいたまま首を傾げた。

私は、なにを言つてるんだろう。どんな答えが欲しいのだろう。

私はなんで、こんなことをこいつに喋つているんだろう。そんなことを思つた。思考がぐちゃぐちゃになつていてる気がした。

不意に、おかしな夢を見たことを思い出した。トップスピードがいなくなる夢だつた気がした。それでリップルは、たつたひとりだけの大切な友だちを失つた、などと思つていた。

きつと、そのせいだ。今日の自分が、なんとなく自分らしくないのも、きつとそのせ이다。

「リップルがなんて言つて欲しいのかはわからねーけどさ、俺はリップルのこと、立派な

魔法少女だと思つてゐるぜ?」

「え?」

「そりや、口は悪いし無愛想だし、舌打ちばかりするけどよ、街のいろんな問題を調べて、どうしたらそれらの問題を解決できるか、とかちゃんと考へてるだろ?」

「それは」

確かにそうだが、認めるのは抵抗があつた。

キヤンディーのために人助けをしてゐるのか、魔法少女として受け持つた地区の人たちを助けるためにこんなことをしているのか、自分でもわからないのだ。前者は自分らしいと言えるし、後者は鬱陶しいお節介だと思える。少なくとも二ヶ月前、魔法少女になつた直後までの自分なら、間違いなく前者だつただろう。いまは、わからない。

幼いころに憧れていた魔法少女は、清く正しい良い子な魔法少女だ。スノーホワイトは、リツブルから見ると、そんな理想の魔法少女のように思えた。

とりたてて活躍が派手というわけではなく、散らばつた小銭を拾つてくれただの、家に置き忘れた弁当を持つてきてくれただの、そんな小さな問題を解決する話が多かつた。ラ・ピュセルと一緒にいることは増えても、そんな小さな問題解決に現れることは変わらなかつた。人助けが好きなのだろうと、そんなふうに思つた。

照れもせずに、人助けがしたいと言ひきり、実行できる者こそ、正しい魔法少女なの

だとリップルは思つてゐる。スノーホワイトがそれで、リップルはそうではない。人助けがしたくないわけではないが、それを言葉にするのは照れくさいという思いがある。

だから、リップルは正しい魔法少女ではないのだと、そう思つていた。

「リップルは、立派に正しい魔法少女をやつてると思うぜ。スノーホワイトとかにも負けないぐらいにな」

「そんなこと」

「あるさ。誰がなんと言つても、俺はそう言つてやるよ。リップルは立派な魔法少女で、俺の自慢の相棒で、友だちだつてな」

トップスピードがふりむいて、ニカッと笑つた。快活で、優しい笑顔だつた。
なぜか目頭が熱くなり、トップスピードから顔を背けた。そむ

誰が相棒だ。友だちになつた憶えはない。そう言おうとして、声が詰まつた。声を出

したら、なぜか涙が出てしまいそうな気がした。

リップルは、小さな舌打ちをした。トップスピードが、微笑んだ気がした。